
泡吹き等の命 ~ Are there "Our" Days? ~

夢現慧琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡吹き等の命 } Are there " Our " Days? }

【Nコード】

N3073K

【作者名】

夢現慧琉

【あらすじ】

泡吹き等の命。ほらいぶきなどのいのち

テーブルトークRPGを下敷きにした小説、ですが。

ご存知なくても読める事と思います。

現代日本社会、異能物、超能力物です。

派手に戦ったりするはずです。

レネゲイドウィルスに感染し、異能を発症した人間達による、命を題材にした物語。

全四幕構成。

四人の視点から、多面的に語って行きます。

第零幕 初めに(前書き)

世界観説明。

必ずしも読まなくても内容はわかります。

第零幕 初めに

おおよその人間関係において、何を差し置いてもいの一番に最重要となる事項といえは、しかし勿論言うまでもなく第一印象そのものだろう。悪い第一印象の、後からの挽回は非常に困難になるはずだ。誰だって初めて会った時に最悪な思い出しかない人間と、また会いたいだなんて思うはずがないゆえに。ましてやその後に関係を続けたいなどと、思うはずがない。

それは文章にも同じことが言える。

書き始めがしみつたれた文章なんて、続きを読みたいと思われるはずが無いのだ。

従って、読んでもらいたい文章 特に小説類 の書き出しは、須く面白く読み手を惹き付けるものでなければならぬ。要は、理解しやすくとも理解しづらくとも構わない、とにかく興味を惹かせるようにすべきなのだ。

ぐいぐいと。

手綱を引くように。

手薬煉を引くかのよう^{てくすね}に、読者の意識をこちら側へ向けるのだ。

……何が言いたいか？

それは、そんなことはわかっているんだということ。わかっているも仕方がないから嫌々ながらも申し訳なく思いながらも、どうしようもなくこれからの話 物語を展開するに当たって、最低限踏まえておいて貰わなくてはならない説明文を、そしてその最低限すらも長々と冗長にならざるを得ないような解説文を、書き並べようとしているということだ。

つまりは弁解である。

ごめんなさい、許してください。ということ。

全く持って、純正ファンタジー以外のファンタジーは肩身が狭い。読者と世界観を共有してないなんて、これは明らかなハンディキ

ヤップだろう。

ふう……、さてさて。あんまり愚痴ついても話が進まない。こちらが仕方なくやっていることだとご理解頂けたと思って、面倒臭いことはさっさと済ませてしまおう。

まずは、時は二十世紀末から二十一世紀初頭にかかるころ、場所はたまかに言っただけ。ここは良い。テレビも車も携帯電話も高校生も、特に注釈をつけるまでもなく普通に存在していると思ってもらって、一向に構わない。常識が常識として通用する。日常が日常として持続する。現実が現実として存在する。問題はここからだ。そんな歓迎すべき当然に、残念ながら次の文言が続いてしまう。そう、“ただし”。

既にこの世界は変貌している。

常識を非常識が。

日常を非日常が。

現実を非現実が。

それぞれがそれぞれを、跡形もなく破壊してしまっている。

『レネゲイドウィルス』

初めに知っておいて貰いたい専門用語、固有名詞はこれだ。『レネゲイドウィルス』　こいつこそが、この世界を根本的に壊している諸悪の根源だ。どんな風にか、といえば、それは無論ウィルスという言葉から連想されるまま、人間に感染することによって、だ。しかし、感染して終り、ではない。こいつに感染してしまった人間は、なんと言うことだろう、特殊な　超能力のような　超常現象的な　幻想染みた　夢のようで悪い夢のような、そんな能力を手に入れる。

便利。

ではない。

テレビショッピングのように上手い話ばかり、ではない。

『レネゲイドウィルス』が蝕むのは、その身体だけではなく、その精神まで……自我に、理性に、思考に、つまりは人間らしさ。力に

溺れた物は人間ではなく、ただの化物と化す。それも、常識的な兵器ではとても太刀打ちが間に合わないような、厄介危険極まりない化物へと。

感染者を、超越した者……一線を越えた者という名の、『オーヴァード』と呼び、中でも人間社会へ回帰不能なほどの化物を『ジャーム』と呼ぶ。

ここまですが“世界の変貌”。

なら、“既に”とはどういう意味か。

巻き込まれてしまいかねない一般の方々には本当に頭が上がりない限りだが、実はこの『レネゲイドウイルス』も『オーヴァード』も、そして『ジャーム』すらも、普通に生きている限りには知る由もなく気付く切欠すらないほどに、世界的に秘密とされ、秘匿されている。

言わば、隣に吸血鬼がいるかもしれないのに、その事を誰も知らない。

知らされていない状況。

不条理不道德極まりない。いつ突然首筋に噛み付かれるかわからないと言うのに、それに対策を講じることすらも許されていない、というのだから。……とはいえ、そんな憤慨はとりあえず飲み込んでもらうしかないだろう。そうでなければ、先へ進むことすらできやしない。雑踏の中にナイフを、あるいは拳銃を、もしくは爆弾を持っている人間がいるかもしれない、と考えれば、まあそれほど大それた話では、ないのかもしれないし。いやいや全く。世の中なんて、不条理不道德極まりない。

続けよう。

一応は、その憤懣のぶつけ先を紹介しておこうか。何故にそんな非人道的な状況になっているのかといえば、それは一重に『UGN』

『ユニバーサル・ガーディアンズ・ネットワーク』の頑張りのお陰だろう。彼らは『オーヴァード』達にも人権を認め、またモラルを求め、要するに『オーヴァード』連中の一般的社会への適合、

迎合、合流を目標と掲げている団体だ。

お志が高いのは感心すべきことかもしれないが、問題はその方法が模索中であり、また対応が全然追いついていないところに在る。

お役所事情とでも言おうか。結局、今の社会に『レネゲイドウィルス』の存在を公表したところで、パニックが起き、迫害が発生し、下手をすると戦争に到達し、行く末は全世界の破滅に陥りかねないというのが現在の『UGN』の見解である。ならば、然るべき準備が出来るまで秘密にしておかなくてはなるまい。

というわけで、世界的秘密組織（笑）『UGN』は、今日も今日とてご苦労様なことに、『オーヴァード』とりわけ『ジャーム』共の引き起こす非現実的な災害・事件を、搜索しては発見し、発見しでは解決し、解決しては隠滅し、と忙しく働いているわけだ。

倫理にとりあえずは添う形である『UGN』と相対させて引き合に出すべき組織があるとすれば、それは『FH』 『ファルス・ハーツ』であろう。こちらはわかりやすくも明快な表現をしてしまえば、オーヴァード至上主義の世界的テロ組織だ。……いや、正確な目的は今のところ謎とされているので、本当にそうであるかは見当もつかない が、やっていることから察するに、恐らくはそんなところであろう。噛み砕いて説明するのなら、超常現象的な『オーヴァード』の力を使いたい放題で、対するところの一般人を虐げような活動をしている輩なわけだ。

当然『UGN』からすれば、『FH』は目の上のこぶだ。

そんなテロ活動・破壊工作をされては、『オーヴァード』 引いては『レネゲイドウィルス』の存在が世界に発覚しかねない。どころか、誤解されて『オーヴァード』達が危険視されてはたまらない。なので、『オーヴァード』の代表組織『UGN』および『FH』は、基本的にいがみ合っているわけだ。

世間一般の与り知らぬ水面下にて。

これが、“既に”の意味。

勿論、『レネゲイドウィルス』やら、感染者『オーヴァード』に

深く関係する組織は、この他にも数多存在している。人の口に戸は立てられないわけで、秘密は秘密として知ってしまう人間がどうしたって出てくるのだ。しかし、(この表現はいささか適当でないかも知れず、当組織の方々には大変恐縮ではあるが)『UGN』や『FH』の派手さに比べれば小数点二桁以下のような組織でしかないため、今は割愛しておこう。

ここまででも十二分に長いのだから。

休憩でも挟もうか？

次から最もややこしい、最後の山場に入る。

いいかな。

先ほどまで、特殊だとか超能力だとか超常現象的だとか幻想染みただとか、曖昧な表現をしていた『オーヴァード』の能力だが、大きく分けて現状十二種類で表記できる。『レネゲイドウイルス』という名称が先に在ったからであるろう、それらの分類は『シンドローム』。症状、という意味の言葉で表現されている。つまりは、感染者である『オーヴァード』に『レネゲイドウイルス』が引き起こす『シンドローム』は、十二種類に分けられるわけだ。内、一人に発症するものは二種類。同じものが二種発症した症例を純血種、異なるものが二種発症した症例を雑種クロスブリードと記すが……ま、ここは良いだろう。洒落た言い方をしているだけだ。確率の計算をすれば当然であるよう、後者の方が多いとだけ思ってもらえれば。

その『シンドローム』の十二種についてこれから触れたいところだが、詳しく説明などとしては日が暮れる。従って細かい話は後々に乞うご期待、ということとして、軽い説明に留めておこう。すんなり理解していただけよう、もう一度だけ記述しておくが、『シンドローム』とは要するに“超能力の種別” “どんな非現実を顕現しうるか”をわかりやすく言い換えているに過ぎない。

それでは、一気に駆け抜けよう。

『シンドローム』には以下の種別がある。

光と闇を自在に操る光学的能力、発症者の五感が限界まで鋭敏に

研ぎ澄まされ行く、

『エンジェルハイロウ』。

細胞が発する生体電流を増幅させて武器とし、応用次第で電子機
構すら服従させる、

『ブラックドッグ』。

流れる血液を盾へ刃へ力へと、果ては別生命体と成す、言つなれ
ば其の者、吸血鬼、

『ブラム「ストーカー」』。

常識をはるか凌駕する怪力、野生の凶獣が如き能力と姿を得る、
存在自体が進化論、

『キユマイラ』。

己が体内組成を臨機応変に変幻させ、皮と肉と骨と内臓を道具の
ように扱いこなす、

『エグザイル』。

躍動・振動・並びに音波、つまりはあらゆる波動を支配し、神速
へと昇華せしめる、

『ハヌマーン』。

周囲を構成する物質という物質を分解・変換・創造し得る、魔術
師にして錬金術師、

『モルフエウス』。

言語理解に精通し、計算能力が充実し、推理能力を超越し、体を
も頭脳で統治する、

『ノイマン』。

物体ではなく座標を把握・掌握、立ち位置を箱庭として弄ぶ、空
間こそ己が所有物、

『オルクス』。

熱の概念に直結し、自らの手足が如く見下し、熱いも寒いも炎も
氷も思うがままの、

『サラマンダー』。

どんな薬物も化学物質も、名より先に熟知し精製する、歩く実験

室にして薬品工場、

『ソラリス』。

相対性理論を指先で体现する、力場に斥力・超重力、時間概念にも行き着く可能性、

『バロール』。

……以上、十二種類。

呼称が安直なのは仕方がない。名づけた人間のネーミングセンスの問題だ。

内二つが一人の感染者に発症する。

とは言え、全部覚えてもらう必要は無く、なんとなく読み流してもらえば、それで良いだろう。結局はただの呼称であり、論文を書きやすくするための分別でしかないのだから。因みにこれら『シンドローム』をさらに細かく、実際に起こりうる現象ごとに分類したものが『エフェクト』。効果、という意味の言葉になるわけだけれども、そこまで細かく区分したところで、この先の文章を読んでもらうのに大した影響はないだろう。むしろ煩雑になるだけだ。

実際のところ……、総じて十二種、一人当たりたった二種の『シンドローム』と違い『エフェクト』の方は、あまりに多岐にわたったものが同時に、しかも絡まりあった形で観測されるため、分割して描写したって研究者以外は嬉しくも無いだろうし。

ただ、伝えておくことがあるとすれば、あれら特殊な力 『オーヴァード』の力は、その『オーヴァード』自身の精神から直接の影響を受け、引き起こされると言うこと。つまり、“目に見える形での能力” 『シンドローム』やら『エフェクト』やらを抜きにした、分かりやすい意味での『レネゲイドウイルス』感染者に備わった特殊能力 は、そのもの彼らの“哲学”、“感情”、“精神性”に、大きく左右されると言うことだ。

うん。

予想通りといえば予想通り。

大変長々と失礼した。

本当にお疲れ様である。

ここまで踏まえてもらえれば、後に続く文章をそれなりにすらすらと、理解しやすくも速やかに読破することが出来ると思う。逆に言えば、あまりにも一般人様方にはわかって頂きづらい単語が頻出してしまったため、このような前書きが必要になってしまったのだが、そこは書き始めに謝ったとおりである。ご容赦いただきたい。

さてと。

これ以上言葉を重ねても仕方がない。

早々に語り始めて、終うとしようか。

……おっと。

肝心の、これから綴る話が一体なんであるかについて触れていなかった。恐らくこんな酔狂な文面に目を通して下さっている時点で、皆様はその程度のことなどご存知なのだろうとは思っただけけれど、やはり書いておかないわけには行かないだろう。

これは、しがない僕等の取るに足らない経験譚　　気取って言わせてもらえるのなら物語。奇妙な我等が世界に後々続いた、悲しい嘔吐き達の夢や、愉快な人喰い共の幻、それらに先駆けた、まるで前置きのような　　法螺吹きみたいなお話だ。

よどみに浮かぶうたかたは、且つ消え、且つ結びて……所詮は我等は泡沫人。

泡と同等の命。

それでは皆様、少々しばしお付き合いの程を。この物語は、最初の語り部である僕　　時鏡謡依。時鏡奏手、時鏡刻深、そして塵散契の提供でお届けします。

第一幕 子守唄のように。 0

「大切なものは失ってから気づくんだって、言うよな」
そうだ。

そいつはそんなことを、漠然と言い始めたんだった。

「俺からすれば……、失ってから気づけるものなんて、かつて大切に思っていたものだけ　そう言うべきだな」

お互いに学生服のまま。

下校途中の寄り道、街角の公園。

四人は座れるベンチに、間を開けて二人だけ、腰かけて。

「実際、俺たちは常日頃から失い続けているだろ。会話をするだけで舌から、呼吸をするだけで肺から、物を見るだけで眼球から、どころか何もしなくても皮膚から、水分が蒸発し、失われてゆく。だが、そのことを認識なんてしやしない。気づきなんかしないのさ」

独白のように台詞が続く。

話に飽きたかのように、僕は姿勢を崩した。

両手をポケットに突っ込み、足を前へ投げ出し、空を仰ぐ。

もはやお決まりの、白く甘い香りのする棒切れを、啜えた唇でゆらゆらと、弄びながら。

「水分は大切に必要不可欠なものだが、俺等はそれがかけがえのない物だとは思っていない。認識していても実感していない。だから失われつつあっても気がつかない。何事にもそれは言えるわけだけ。まったくもって、同一のまま持続される物証なんざ無い。獲得した瞬間から、全てが失われる。その中で気づけるものの、なんて希少なことだろうな」

空は朱色がかった。

降下の速度を増す気温、明日を意識し出す人々。

家に帰りたいと思ひもしない、思春期染みた我等、高等学校の男子生徒二名。

緩やかな風、遠く騒がしい音、夕暮れの雰囲気、世間からの隔離を幻想的に感じる時間。

隣を見やると、そいつの横顔、それも綺麗な側が映るが、目など合わされずに、言葉が連なる。

「俺は自分のことを人並み以上に特別扱いする癖は持っていないが、現代日本社会の一般男子高校生としては珍しく、明らかに大切だったものをあらかた失ったって経験を持つていやがる。自惚れなんかじゃなく、多分常識的な判断としてな。自己、人格を形成するのは、勿論言うまでもなく過去と言う経験なんだろうが、その過去に俺はいつも怯えさせられている。すなわち、また失うんじゃないだろうか、いつか失くしてしまうんじゃないだろうか、そんな風に恰好悪くみつともなく、怯えきつちゃってんだな。おかげで最近じゃ、大切そうなもの……んなもん全部が全部、嘘で偽物で夢で幻なんじゃねえか、否、そうであつたらむしろ嬉しい……とすら、感じてしまつてる。どうせ失うんだつたらよ」

僕はポケットから手を出した。

「トラウマかい？」

「そんな大層なものじゃない」

手をベンチにつき、ずり落ちた体を起こす。

「トラウマだろ。精神的外傷さ」

「決めつけるなよ」

「教えてあげているんだよ」

「偉そうだな。じゃ、それでも構わねえぜ」

すっかり短くなった棒切れを、唇から外し、右手に取った。

「で。続きをどうぞ」

「……泡つてあるだろ」

「あるね」

「のぼつて、臨界に達し、やがてはじける。価値観やら命やら

そいつらも同じなんじゃないかってな。詩人なら誰でも言いそうだけだよ」

「はじめて、失われるって？ だけど君は詩人じゃないだろう」
「当たり前だ。俺は詩人なんかじゃない。詩はおるか、日記さえつけたことが無い。小学校の夏休み、絵日記なんか全部親に書いてもらった。記録は要らない、表現は拙い、何故なら俺がいるし、体もここにあるからな」

まるで青い。

若い台詞を懸命に、恥ずかしがりもしないで。

そいつは言うし、僕は聞くし、しかも互いに響いていた。

眉ひとつ動かさずに、照れ隠しみたいに、右手の物を僕は眺めて、言う。

「だから、何を言いたいのかな。悪いけれど僕は、君の持論にも君の人生にも、大した興味は持ち合わせていないんだよ。多忙な中わざわざ時間を割いてまで、君の妄言に付き合っただけでいるこちらの身にもなつて欲しいね」

「いやはやそれは悪いことをしたな。てっきり俺は、お前が俺の持論と人生観を聞きたくて聞きたくてたまらなくて、静かにご静聴してくださいってるのかと思つてたぜ。だったらこっちもすっかり話してやらねえと、つて思つてな」

「まさか。そんなこと、あるわけがないじゃないか」

「そうかよ」

「そつだよ」

苦笑いのような含み笑いを、共に浮かべた。

「つまり、あれだよ」

「どれぞ」

ここでそいつは、やっと僕の方を見た。

目が合い、顔が向かい合う。

そいつの顔の右側面は、かつての火災の痕が広がっていた。

醜く爛れた皮膚、まばらな髪、涼やかな瞳、されどにこやかに微笑む。

「また話そうぜ」

「To be continued……、今日はもう帰るかい？」
「おう」

颯爽とベンチから立ち上がり、カバンを肩に担いで、軽くそいつは手を振った。

「じゃあな」

「続きを楽しみにしないでおくよ」

「頼むぜ、謡依」

君は僕の親友だよ。

そしてそれは、失われはしないさ、鬨。

なんて、口に出せないまま、僕は握っていた物を口に放り込む。

ココアシガレットはずっと好きなままだ。

第一幕 子守唄のように。 1

ときかがみ ことたい
時鏡謡依。

それが僕の名前だ。古風に言うのなら、時鏡家の次期当主

長男である我が父の、またその長男であると、ただそれを指すだけの言葉 ではある。由緒あると表現して間違いではない時鏡家なので、相応に親戚筋は多く存在している。つまり、体面が在ると言うことで……そのお通夜に僕は出席しないわけにはいかなかった。

ただ、いくら家系のことを疎ましく感じている僕でも、体面など関係なく、その日は参列しなくてはならないと、そう感じた。

亡くなったのは、我が父の弟 僕から見れば叔父に当たる、時鏡響基さんだった。

厳格で気難しい雰囲気の子 揮居とは違い、おっとりとして優しげで、僕自身も生前随分お世話になった方である。

時鏡家の多くが務めている部類の仕事……中でも響基さんは、学者職に就いていたはずだ。その仕事の最中に命を失ったと言うことで、これはおそらく殉職なのだろうか。学者とは言え、仕事の仕事……世間一般の教授職とは一線を画し、ファンタジーがごとき分野を扱っていたはずである。お決まりに爆発が起きたわけでは無いだろうけど。

しかし、響基さんともはや話すことはないのだと思うと、さすがに少しこみあげてくるものがある。本当に良くして頂いた。自分の父が彼であつたら良かったなどと思ったことは、一度や二度ではなかったのだ。優しいという言葉が無個性を主張するのであれば、彼のことはこう表現すべきかもしれない。

折り合いをつけるのが上手い人、と。

事態を受け止め、受け入れ、少なくとも周囲は幸福であるように、纏める事の出来る人。板ばさみにされたところで苦しいとは言わず、最後には周囲を笑顔にしてくれた。個性が無いわけではなく、主張が

無いわけでもなく。確かに、積極的に自体を打破していく英雄のような人間では、なかったけれども。それでも、失われて気づくほどに、僕にとってかけがえのない人だった。

そして、僕以上に。

響基さんの家族にとって、かけがえのない人物だったろう。

恙無く式が進む中、僕はそんなことを考えていた。

喪主を務める響基さんの配偶者、時鏡弾嬉ひきさんは、感情を押し殺したように気丈にしていた。周囲を不快になど決してさせない、巧みな、しかし心底悼んでいるかのような微笑を、小さな口元に湛えながら。

やがて式が終わり、通夜ぶるまいとなる。

移動の過程で、僕は奏手かなてと刻深きこみを見つけたので、声をかけた。

「……やあ、奏手。刻深」

最初に振りかえったのは、弟である刻深の方だった。

「ああ。謡依さん……」

確か歳は、二・三離れていたから、今は中学生だろう。中学の二年ごろ、か。短く整えてある髪、すらりとし始めた手足。喪服として、ブレザーの制服を着こんでいる。年齢の割に大人びた印象。明瞭な声色と発音、発言のテンポ。落ち着いた雰囲気において、僕は刻深に勝る同年代を見たことが無い。

彼は頭を下げた。

「今日はお越しいただき、ありがとうございます」

「心底お悔やみ申し上げますよ。響基さんのことは……。うん。ええと、大丈夫かい？」

「はい。俺は平気です。でも、姉さんが」

「私が何よ、刻深」

そこでやっと奏手はこちらを向き、口を開いた。

少し癖のある巻き毛を、肩口過ぎあたりにまで伸ばしている。学年は僕と同じはずであるから、高校二年生のはずだ。こちら制服を着ている。身内びいきかもしれないが、整った顔立ち。しかし、

弟と良く似たつりあがった目つきが、睨まれると怖い印象を与える。目元が少し赤い。

「私も平気よ。平気これ極まりないわ」

気丈に言ってくれる。

「目元が赤いよ」

「今は泣いてないでしょ。……ふん、なあに、謡依。髪伸ばしてるわけ？ 女の子みたいに見えて気持ち悪いわ、華奢なんだから。刻深みたいに短くしたらいいのに」

「悪いね。でも170をとくに超えてる女の子が、そういるとは思わないけれどさ」

「それは男女差別じゃないかしら。女性を代表して貴方を叩きつぶすわよ。そうしたら身長も低くなるじゃないの。何を思って伸ばしてるの？ ただでさえ悪い目が、余計に悪くなるわよ。牛乳瓶の底みたいな眼鏡になっても知らないからね」

「いつの時代だよ」

「目つきも悪いのにね」

「お互い様だろう」

「ふん」

そこで一旦言葉が途切れた。

見計らったように、刻深が口をはさむ。

「姉さん、謡依さん。そろそろ行かないと」

「わかってるわ」

「うんうん、刻深はいつでも時間に正確な良い奴だな。奏手とは」

「父さんの葬式と一緒に埋葬するわよ、謡依」

「……、ま、行こうか」

「はい」

「ええ」

食卓へ向かう。

「ねえ、謡依。この世界のことを、どう思う？」

隣り合った右側の席で、奏手はそう、話し始めた。

親戚一同つつましやかな食事をしながら、小さめの声で。

父親を亡くしたとは言え、奏手も刻深もまだ飲酒すら制限されている子供だ。大人達もあまり話題を振ってはこない。もっぱら、近い世代の僕等いとこ同士、小声で会話を続けていた。僕の両親もそれを止めたりなどはしない。

「突然何を言い出すんだらうね。世界とはまた大きな話題を持ち出してきたじゃないか」

「父さんが言ってたのよ」

「響基さんが？」

興味を示したような僕を受け、奏手は頷き、話を続ける。

「謡依は、この世界が。厳密に言えば、人間共が、って感じだけけど……、どうしようもない救いようのない、言っちゃえばくそつたれの、ろくでもない代物だと思う？」

「さすがにそんなにまで言い切るほど、世の中に絶望してないよ」

「それじゃ、この世界は素晴らしくて最高で、素敵で幸福に満ちたこれ以上を望むなんてとんでもない完成形だなんて思うわけ？」

「まさか。夢にすら思わないさ」

「じゃ、どう思うわけよ」

一種投げやりなような奏手のもの言いに、僕は箸を一度置く。

「あのさあ、そんな善か悪か白か黒かのような二元論で、世界が語れるわけがないだろう？ 限りなく灰色じゃないか。気分次第、考え方次第。明日の吹く風次第なんだろう、要は。それとも奏手は僕のことを、0か1かの演算で世界を割り出す、電子製品コンピュータだとも思っているのかい？」

「思っていないわ。二元論で語れるとも、ちつとも思っていない。……だから、なんですって」

「だから？」

奏手は食事を咀嚼しながら頷き、飲み込んでから言った。

「だから、『世界をより良く』　つまりは『自分をより良く』

、明日をより良く。皆をより良く、そう思えることこそが、『生きる』と言う言葉の意味だって」

「……ふうん」

「とりわけ人間にとってはね。そう考えられない人は、生きているのではなく死んでいる途中だけなんだって……、そんなことを言っていたわ」

「成程ね」

響基さんの言いそうなことだ、と。僕は箸を手に取り、食事を再開した。

奏手の方は、まだ話が終わってなかったらしい。

「……でもそんなの、こんな世界じゃとっても難しいじゃないのよ、って私は反論したわ」

「ごもつともだね。考えるだけで難しい」

「ええ。だけど難しいのは何故か、って訊き返されたわ。ソクラテスじゃないんだから訊き返さないでよ、とか思ったけど。考えてみたら、それはきつと　　」

「不信かい」

「……そうね」

話を横から聞いているのか、奏手の向こう側の刻深が、ちらりとこちらを見た。

「自分を信じられない、他人を信じられない。徒勞に終わるのではないか、裏切られるのではないか。全てが無駄に帰すんじゃないか　　その恐怖。そして事実、しょっちゅうその恐怖は肯定され続けるわけよ」

「それも『生きる』って、ことなんじゃないか？」

「まあね。でもそれに打ちひしがれて、折れたらあとは『死んでいく』だけなのよ」

「かもしれないな」

流れが見えないので、適当に相槌を打つ。奏手が小さい、しかし持ち前の美声。名前のままに奏でるかのような涼やかな声で、言いたいことを吐き出しきるのを待つ。内容に興味も在ったし、聞いて受け止めることが……、弔いであり、慰めではないかと思ったからだ。そんな理由づけをする自分を、厚かましくも感じるけどね。

「つまりは価値を信じられないからなのよ。世界の価値を、自分の価値を。努力の価値を、あるいは徒労の価値を。それは仕方ないと思う。だから父さんは、価値を 構築、確立しうる研究を 父さんの大切な友人と行ってるって……そう……」

「……うん？」

父親のことを思い出してしまったのか、そこで俯いてしまった奏手。背を、慰めるように軽く撫でてやってみる。

やれやれ。

「……ごめん。ありがと。それとやらしいわね。自然に触ってんじやないわよ」

「お前な……、別にいいけどね。失笑させられるなあ、いつもいつも、どうも」

「ふん。まあ、そう言うことだったらしいわ。その研究の途中の事故だったらしいわよ。完成間近だったんじゃないかと思うけれどね」

「そうなのか」

「詳しいところは秘密よ」

「機密の間違いじゃないかい？」

「そうね。いつものことよ。私達には知る権利が無いの。ね、刻深が酷い話だわ」

「なぜそこで俺に振るんだ、姉さん」

「当惑したそぶりすら見せず、しかし台詞だけは抗議口調で刻深が言う。」

「別に。謡依とばつかり話してたら、ご飯が不味くなるじゃない」
「はは、そもそも味を楽しむための食事じゃないと、僕なんかは邪推するんだけどね」

「その物言いが腹立たしい、って言うてんのよ。万事食事は美味し
くあるべきだわ。それが生きてるってことでしょ、刻深」

「だから俺に振らないでくれ、姉さん」

僕は再び失笑しつつ、奏手と刻深を、そして奥にいる彼らの母、
弾嬉さんを眺める。

傷ついているし、喪失感もあるだろうけれど、さすがは響基さ
んのご家族だと思った。

「……なんて、まるで偽善者ぶった善人のようだね」

隣にすら聞こえないような吐息で、僕はそう呟き……、食事を終
らせに取り掛かった。

* * *

翌日のお葬式。

行程を詳しく記したところで、得する人物など居やしないだろう
と言うことで、大幅に割愛。平穩無事に響基さんは埋葬されていっ
たと、それだけの文章で事足りる。彼の冥福を、心より祈った。

ひと段落が付き、各自帰路につき始めていたタイミングで、

「どうも、謡依君」

と、声をかけられた。

視点をそちらの方へ向ける。

小柄な人物が、こちらを見ていた。

「ああ、弾嬉さん。この度は……ご愁傷様でしたね……。そしてお
疲れ様です」

「ええ……。昨日今日と、ありがとうね。あの人も喜んでると思う

し、奏手も、刻深も……謡依君と話せて、少し落ち着いたみたいだから」

そう、弾嬉さんは可愛らしく微笑む。少し安堵したような、悲しみつつも前向きさを失わない……複雑にして心地よい笑顔だった。

時鏡弾嬉。

響基さんに嫁ぎ、時鏡家に参入することとなった女性。その容姿は、驚くほどに若い。若々しいと言つのではなく、ともすれば幼いと表現されかねないほどだ。小柄な体型、ショートボブの髪型、猫のように大きめの瞳も手伝って、中学生にすら見えてしまう。二子（しかも上は高校生）の母親だと、信じてもらう方が難しい。しかし中身は年齢（実年齢までは知らないが）相応かそれ以上に成熟していて、礼儀をわきまえ機知に富んで落ち着き払い、何より彼女は百の微笑を使い分ける。

微笑んでいない弾嬉さんを、僕は見たことが無い。

この底知れないちぐはぐさに、飄々とした高校生と名高い僕でさえ、向かい合うといつもたじたじさせられてしまう。ましてやこのような場面にあつては、だ。

「いえ……、僕の出来ることなんて少ないものですよ」

仕方が無いので、詰まらない発言を並べて場をしのぐ。

「長さで言えば数ミリあるかどうかです。思わずミクロン表示にしたくなるほどです。せめて身長程度の度量は持ちたいもの、なんです。……、奏手とも刻深とも、昨日ちよこつと話しただけです。ね。格言めいた慰めすら言えませんでした」

「それでいいのよ。気を置かずに話せる相手って、ありがたいものなんだから」

目の前の人は、彼女にとってのその相手を一人……亡くしてしまつたのだと。気づいてしまい、またもやかける言葉を失う。必要以上の同情はわずらわしいだけだし、かといってここで適当な発言は不躰が過ぎるだろう。……と。そんな僕の思考を見抜いたのか、弾嬉さんは安心させるように頬を緩ませる。

「大丈夫。ふふ、謡依君はいつも鋭くて思慮深いわね。響基さんもそう言ってた。優れた刃物のような子。切れ味の危険さまで知っていて、だからいつでも鞘をして、使いどころを探してる。ってそんなようなこと」

「褒めすぎですね。褒められたところで、可愛くもない照れ笑いくらいしか出せるものはありやしません。それに、あっさり頭の内側を看破されてから言われたんじゃ、気恥ずかしくってたまりませんよ」

敵わないと心底感じ、僕は両手をひらひらさせる。

「あらそう」

弾嬉さんが今度はころころと笑う。容貌に似合った、爛漫らしい笑い方だった。

「話せて良かったわ。なかなか忙しくて、声を掛けられなかったの。また……七七日もお願いするわね」

「はい。また」

「気をつけてお帰りなさいな」

最後に大人っぽい、引き締まったような笑みを見せて。弾嬉さんは喪主の務めの続きだろう。葬儀場の方へ戻って行った。

何とはなしに見送る。

小柄で真面目で気丈で良く働いて、微笑んで。凄い自制心と精力だなあ、と思う。

「お母さんと話してたの？」

「おう！」

感想文を心の中で述べてたところで、背後から声をかけられた。少し驚いた。

奏手……と、その後ろに刻深だった。

「何よ、未亡人狙いなわけ？」

「人をスケコマシみたいに言わないでくれよ。そんな設定は持ってないんだ、僕は」

「ああ、そう言えばそうだったわね。謡依ってば、彼女の一人もい

ないもんね」

「悪いかい？」

向き直って、おどけてみせる。

ついでに開き直ってもいる。

「私は別に不都合を被ったりしないけど、時鏡家を受け継ぐ者としては深刻なんじゃない？ 跡取りが出来なかったら、揮居伯父さんきつと五月蠅いわよ。あ、わかった。あれじゃない、もしかしたら謡依、周囲から男に見られてなかったりしてね。どう、刻深に娶ってもらおう？」

「気持ちの悪いことを言わないでくれ」

「まったくだ。姉さん、冗談としても悪い類の物だ。それは」

僕と刻深がそろって不満を呈す。はつきり言っただけだな。

「そもそも何なんだい？ いきなり背後から声をかけてくれてさ。

僕が敏腕スナイパーだったらどうするつもりだよ。悪態をつきに来たんだしたら、刻深君に向かってやってくれないか」

「謡依さん、さりげなく水を向けないでください。そこで姉さんがその気になったら、どうするつもりですか」

「そうよ。もつと言ってやりなさい、刻深」

「姉さんも。そこで乗るのはおかしい」

「どうするつもりかって？ 僕としては万々歳さ」

「俺も怒りますよ」

「ごめんね」

「悪かったわ」

年下に謝る僕等だった。刻深が本気で怒ると結構怖い。彼は淡々と……、緩まず手を抜かず怒りを表現し、着実に恐怖心を浸透させてくるのだ。良くある話で、からかって楽しい相手上位にして、怒らすと怖い相手上位と言う、まあ、そう、何事もほどほどが一番つてことだ。

そこで気持ちを切り替えたように、奏手が口を開いた。

「母さんがね」

「うん？」

「母さんが一番泣いてたわ」

「……………」

いつ、とも、どこで、とも、なんで、とすら、訊く気はしない。
言わずもがな、だ。

「改めて凄いな、弾嬉さんは」

ただそう言う感想を抱いて感心し、口に出した。

奏手も頷き、刻深も頷いた。

「だから私も、弱音はもはや吐かないわ。母さんと父さんの娘だものね」

「へえ」

「うちは共働きだったし、だから母さんも働いてるし。節操ある生活してるし、だから蓄えもあるし。時鏡家の結束は強いし、だから助けてもらえるし。感傷以外で悩ましいことなんかないんだから。

私はしつかり『生きて』行く」

「恰好良いね」

「でしょう？」

奏手はにやりと笑って 彼女らしい微笑み方を、やっと見られた気がする 僕に向かってそう言った。大方、宣言を誰かに聞いてもらいたくて、声をかけてきたというところだろう。良いように使われているなあ、と思わなくはないが。

「と言うわけで、私も働くことにしたわ」

「え？」

聞き違えたかと思った。

「おいおい、いつから？ どこで？ なんでだい？」

「言わずもがなでしょそんなの。時鏡家のお仕事、よ。父さんもそこで働いてたわけだし、母さんもそこで働いてるもの」

「正気かい？ 学生の内から？」

これ見よがしに奏手は髪の毛をふわっとかきあげ、両腕を広げるようにした。

「この業界では、珍しいことじゃないはずよ。既に私は適性があるって、わかってるし、ね」

「恐れ多くも忠告させてもらっけれど、やめておいた方が良しぜ。世の中において、群を抜いてるくでもない世界だろう。絶対後悔する。若気の至りに任せるのはやめたまえ、だ。刻深、君も言ってやりなよ。お姉さんがご乱心だよ」

「悪いけれど謡依さん。俺もその面では、姉さんに同意してるんです」

「……君もかい。このシスコンめ」

「否定はしませんよ。そして姉さんはブラコンだ」

「仲良し姉弟でしょ」

ふう、と思わずため息を漏らしてしまう。願わくば、いところであり幼馴染でもある彼らの間違った奇行を止めてやりたいところだったけれど、残念なことに決意が岩のように恐ろしく固そうだ。梃子でも動かないとは、こういうことを言うんだろう。

信じられない。

死に行くようなものだ。

だからこの一族が苦手なんだ、僕は。

「何だい……、響基さんの死因でも詳しく知りたくなっただのかな？」

「違うわ。興味が無いとは言わないけれど、殊更それを知るために選んだ選択肢じゃない」

「それじゃ、なんで？」

「父さんが価値あることをしていたと、信じるからよ」

「……」

強い意志が、奏手の瞳から垣間見えた。

「それに私達って、きつと優秀だっと思わない？ 優秀な才能はより活かせる場面で、生かすべきなのよ。才能、方針、意志に境遇、揃っているのに、それでも謡依は止めるわけ？」

「止めるね。……いいや、止めない。好きにするがいいさ。好んで禁忌に縛られる奴らのことなんか知りもしないさ。自らの選択に骨

でも埋めるがいいさ。決して僕はそれを拾いやしないさ。精々前途に幸多からんことを」

僕はお手上げの姿勢を取る。はん、別に。良く知った人間が死地に向かおうとしているのは喜ばしい話ではないが、かといって止める権利も持つてはいまい。加えて、労力を割いたところで無駄だろうし。もつと言え、僕はそこまで情に厚く思いやり深い人間でもない。飄々としているのさ。

「そう。許可してくれて嬉しいわ、謡依君」

「いえいえ、お嬢様におぼっちゃま。ただし、僕を引き込まないとだけは約束してくれ」

「誰が謡依なんかを。頼まれたって嫌だわ」

「ならば重畳」

僕は諦めのため息を、もう一度吐いた。

懐から件の濃い青をした小箱を取り出し、中に入っている白くて細長い奴を取り出す。式の最中はさすがに我慢していたのだが、いい加減あの味が恋しくて仕方がない。すなわち、愛すべき駄菓子のココアシガレット。

口に啜える。

「ぶつ、謡依、まだそんな子供っぽいの食べてたの？」

「構わないだろう？ それとも奏手や刻深はやめちゃったのかい。

だったらあの勝負」

「まさか」

そう言つて奏手は細長い筒のシルエット　マーブルチョコを取り出し。

刻深の方は青い顆粒の入ったプラスチックケース　ミンツを取り出す。

二人揃つて中身を手に取り、口に放り込んで見せた。

さっきのことを忘れたかのように、三人ともうつかり吹き出してしまった。

「一番最初に飽きた人の負け　、一途に駄菓子好きアピールゲー

△。まだまだ継続中よ」

「言いだしつぺは、謡依さんでしたっけね」

「ははん。良く覚えているね」

お互い、つまらない意地の張り合いが随分とまあ、続いているものだ。既に10年近いんじゃないかなろうか。いけないな、場からしたら不謹慎であるのに、愉快で下らない笑いが止まらない。

そこで刻深が、しれっと言った。

「俺は、また三人でセッションをしたいとも、思ってます」

かつて三人でバンドもどきをしていた、そんな話だ。

「……そんな機会は多分、もうないさ。美しき中学の頃の思い出としておきなよ」

「俺は小学生でした」

「どっちでも構わないよ。機会が無いことには変わらないからね。

……そろそろ、帰るよ。父親も母親も、おそらく待ちくたびれている」

僕はいい加減会話を切り上げる。あとは帰るだけと言うところで、妙に時間を食ってしまった。他の部分は不可抗力としても、聞き捨てならない爆弾発言をしてくれたせいでのロスだ。いいけれどもね。直後の笑い話で流しておくぞ。

歩き出そうとしたところで、往生際悪く。

「謡依」

奏手が言った。

「……何だい？」

「ありがと」

そっぽを向いていた。

ゆえに僕も背を向ける。

「どづいたしまして。またの公演をご期待下さい」
最大限そっけなく告げてから、帰路につく。

第一幕 子守唄のように。 2

我等が紙燭灯しやくび高等学校は、東京都啼草市なぐさを所在地とする、とりあえずは進学校と評価されし教育機関だ。敷地面積、総生徒数、進学率……それらを書き並べることに意味はないだろう（知りもしない）が、それぞれ一般の水準を凌駕している確信はある。僕こと時鏡謡依はその頃、紙燭灯高等学校の二年四組に所属していた。奏手、そして刻深とは同じ中学に通っていたのだけれども、高校受験を経て、彼らに別れを告げ、この学校に入学したのだった。なんて、大仰に言ってみても大したドラマなわけでもない。先のお葬式のようにして、何かの拍子に会うことも多いわけだしね。

受験した理由は、僕自身にも定かではない。

体質に合う校風を探していた気もするし、なあなあな中学時代の記憶から逃亡したかっただけかもしれない。あるいはただの結果として流れ着いただけとか。理由は何にせよ間違いなく、僕はその学校でかけがえの無い友人たちと出会うこととなった。

大それた表現を用いるなら、それら出会いは決定的だったのだろう。何にとつてかは当然、僕の人生について、だ。これから説明するあいつの文言ではないが、人を決定し構築してゆくのは、各々の過去と経験、記憶なのだから。

したがって、出会いは人の構築にとつてかけがえない。

時鏡謡依について述べるのに、彼の存在は不可欠だ。

その名を、続末つひまへ闘むなと言った。

身長は僕と同じ程度。だが奏手に揶揄されるほどに華奢な僕と違って、闘の体格はそこそ良い。ちょうど良い、という表現の方が適正かもしれない。細過ぎず太過ぎず、時代によつては細マツチヨとか言われかねない程度に、均整がとれている。勉学はそこそこといった程度、対して体育の時は結構な活躍をする。快活で人当たりが良い好青年だ。しかし、ただの好青年であったのなら、僕にここ

まで影響を与えることはなかっただろう。

鬨の顔には火傷の痕があった。

小さなものではなく、ほとんど顔面の右半分……面積で言うのなら、所感四割弱程度。おかげで右側の髪も、生えているところはまばらだ。元の造形としてはすらりとした　好青年に相応しい美顔なだけに、火傷痕の存在感は凄絶な物がある。だのに鬨は、顔を隠そうともせず、その痕を恥じらいもしない。活発に人と交流し、元気良く日々を過ごし、冗談を　時にはブラックジョークさえ飛ばす。

勿論、鬨は火災に見舞われた経験があるわけだが、その際に失ったのは何も見栄えの良い顔だけではない。母親も。父親も。弟さえも。中学三年生を半分ほど過ぎた頃に、失っている。一家全焼だ。辛うじて彼は……彼だけは、命を取り留めた、と言うことらしい。

親戚　父方の伯母に引き取られた関係で、こちらの方に越してきたそうだ。以前は関西の方にいたと聞いている。

酷い話だ、可哀そうだと、誰もが言う。

口には出さなかったが、僕もそう思った。

トラウマ　精神的外傷と言うのは、勝手な意見でも無責任な感想でもないのだ。間違はなく鬨は、それに類するものを背負っているはずだろう。表に出したり、そのことで沈みきったまま帰ってこなかったりは、しないだけで。

鬨は独自の人生観を持っている。

こいつは馬鹿だとか、記憶喪失だとか、もしくは家族をなんとも思っていない冷血だったとか、そんなわけではない。なのに何故、塞ぎ込まずに毎日を送れるのかと、僕は最初不思議だった。言葉を交わすようになった動機は、そのあたりなのだけれど……仲良くなつて、気が付いた。彼は克服したわけではないのだ、と。凄惨な体験を過去の物として葬ったりは、決してしていないのだと。

おそらく、探っているのだ。探し続けているんだらう。自分がそんな仕打ちを受けた理由を、その意味を。世間と接し合っているの

ではなく、接し方を保留し続けているだけ。決めあぐねているだけだ。そつなく保留し続け、内面と外面との状況関係を維持し続けている様子が、快活で元気な好青年に見えているだけなのだ。

さりげなく踏み込ませず、さりとして踏み込みもせず。深く関係せず、無視もしない。誰とでも仲良くなるのではなく、誰とも必要以上に仲良くならない。そうして保留をしながら、独自の人生観を構築し続けている。

それが、僕の感じた鬨の人間像だった。

もし、彼が踏み込んだ人間、あるいは踏み込ませた人間がいるとしたら、火災の記憶より前か。それか、僕くらいのものだろう。

鬨の方が僕のことを最初どう思ったか、その印象がどんな風に変化していったかはわからない。僕のことを変な奴だと表現はしたが、それ以上詳しく具体的な評価をされた覚えはない。

しかし何処かで、確かに。

時鏡謡依は続末鬨のさりげない拒絶を無視して踏み込んだのだろうし、続末鬨の方もまた、時鏡謡依に必要以上に踏み込んだのだ。

やがていつしか 高校に入学してから一年も経過した頃には、僕等は二人でいることが多くなり、互いに詰まらないことやややこしいことを語り合う仲になった。

そんな感じの二人のある日の昼休み。

確か、二学期目が始まり、秋らしい気配が漂ってきた頃だったか。「よお、謡依。早速だが俺のジョークを聞いてくれ。さっきの授業の最中に考えたんだ」

詰襟学ランを着こんだ僕に、まだワイシャツ姿から脱していない鬨が、机に腰掛けて会話を始めてきた。

母親が丁寧にも毎朝作って下さる弁当の包みを開きつつ、受ける。「おいおい、僕の貴重なお昼休みをそうやって侵犯するのかい？

食事をしながらで失礼するけど、聞いてあげても良いよ。ただし面白くなかったら、それなりの覚悟はしておいてほしいね」

「おう、任せておけ。ええと、よし。こんな話だ。そろそろ寒さも

本格的に増してきた頃、ジャックがお洒落なウィンドブレーカーを着てきたんだ。友人のボブはそれを見て言った。『ヘイ、ジャック！ 縦のストライプがクールなウィンドブレーカーを着ているーネ！』」

「『オウ、イエス、ボブ！ ナイキで980エンでオカイドクだったのサ！』」

「安っ！ 叩き売りじゃねーかジャック！」

「『ハッハー、このくらい御茶の子さいさいサー！』」

「ジャック続けるのかよ！ いや、かまわないけどな……。ボブはそこで、『オーグッド！ 僕も今日ナイキへ行つて、横ストライプのを買うYO！ 明日会うのを楽しみにしてるんだZE！』てな具合でな。その日は別れたわけだ」

「『オー、リアリイ？』」

「ジャックはもういいってんだよ！」

「オウ、マイ、ゴード。……で？ 全然面白くないんだけどね」
オーバー気味に肩をすくめて、僕はそう言う。鬨は人差し指を立てチツチと振る、苛立たせるためとしか思えないアクションをしてみせた。

「次の日ボブがジャックの前に現れた」

「『ヘロー、ボブ！ クールなウィンドブレーカーはシヨッピングできたかい？』」

「ノリノリだなお前」

「内容が期待外れっばいから、盛り上げてあげてるんじゃないか」
「失礼な奴だな。まあ、ボブは言うのさ。『オフコースさジャック！ これを見てくれ！ ルックデイス、ルックデイス！』と、そう得意げに、白いマスクを指して見せるんだ。ああ勿論、ウィンドブレーカーは着ちやいない」

「ワッツ？ マスクってあれかい、くしゃみとかでツバキが飛ぶのを防ぐ」

「その通り」

「どづいつことさ。何を間違えてしまったんだい」

「考えてみるよ」

ニヤニヤ笑って鬨は言う。

僕はお弁当箱の蓋を開けながら、考えてみた。

ウィンドブレーカーで。縦ストライプ……ああ、ボブは横ストライプのを買うとか言ってたんだっけ。横ストライプ。それはまあ、横縞柄ってことだろうな。横縞なウィンドブレーカー……。よこしま……っておいおい、こらこらこらこら……。

口に何か入れる前に気付いて良かった。

「……、鬨君、下らない駄洒落を自慢げに話すものじゃないよ……」

「なんだと。お前笑ってるじゃないか。肩が揺れてるぜ」

「はっはっは、いやいやまあまあ。横ストライプ、横縞、よこしま、邪。で、ウィンドブレーカーね。風邪防ぐわけだな。つつ、詰まらない。あははははは」

「受けてんじやないか謡依。俺の勝ちってこった」

「勝負じゃないだろう」

「褒美くらいよこせよ。ほら、いただき！」

鬨が手を伸ばして、僕の卵焼きをつまみとった。

驚いて顔を上げた時には既に、味の染みた黄色いおかずは彼の口に消えている。

「なっ！　なんてことをするんだ！　横暴じゃないか！」

「かつかつか。なかなか美味しかったぜ。料理が上手いなお袋さん」

「ち。褒めたところで、これ以上やらないよ」

取られないうちに、昼食を開始する。

あー、本当に下らない。なんで笑ってしまったんだ。己を恥じるばかりだ。精進が必要だ。

そのままさらに他愛のない会話へ突入する。いつものことだ。

「英語の授業中にピンと思いついたんだな、これが」

「先生が聞いたら泣いてしまわれるよ。しかし、ウィンドと風邪ね。だから似非外国人だったわけだ」

「助長したのはそつちだろ。まー、風邪だ。インフルエンザウイルスだ。感染拡大だ。日本沈没だ」

「風邪とウイルスは、今では別物として扱われてるんだよ」

「細かいところを突っ込む奴だな。そう言や、インフルエンザのワクチンって結構信用ならないんだってな」

「毎年ウイルスは新しくなるからね。そのたびにワクチンを予想して先回りしなくちゃならない。はずれると大流行するんだよ」

「ふうん」

頷いて。鬨は売店で買ったのだろう、菓子パンを開く。

僕は梅干しを箸で千切り、お米と一緒に口にする。梅干しを発明した人間は至高だ。

「なんて言っただけ……袋固いんだよな、コレ……、そうゆー追いかけてこみたいなの。入れ子構造？」

「マトリョーシカかい？」

「どんな鹿だよ。真つ赤な御鼻なのか。おお、開いた」

「突っ込みどころしかない発言をしないでくれよ。ロシアの伝統的なおもちゃさ。女の子の形をした人形を開けると、中に似たような人形が入っていて、それをまた開くと中にさらに小さな人形が……つて。君も見たことあるだろう？　そして鼻が赤いのはトナカイであつて鹿じゃないよ」

「ふもふもふ」

「聞きなよ」

マイペースにパンを頬張る鬨。仕方が無いので僕も食事を続ける。お昼休み。食事をしている生徒が大部分だが、食堂へ出かける者もいれば、教室で別のことをしている者もいる。共通しているのは、大体お決まりの人間同士で集団と集合を作り、学生生活を謳歌していると言つことだ。そして僕ら二人は、それら群に埋もれることが少ない。

一通り咀嚼し、飲み込んだのか、鬨が言う。

「ん……で、その鹿みたいな構造を、入れ子って言うんだな。じゃ、

「追いかけてっことはなんだよ？」

「いたちごっこかい？」

「鹿だったりいたちだったり動物が好きだな」

「鹿じゃないってばさ。そんなに鹿が見たければ奈良にでも行くが
良いよ。あそこには古墳と大仏と鹿しか存在しないと聞くからね」

「お前今すぐ奈良県民に土下座しろ。……いたちごっこね。英語で
なんて言うんだらうな」

「また冗談の種にでもするつもりかい？ vic ious cir
cleだよ」

「あれこれと良く知っていやがる奴だぜ。ヴィシヤス？ シド・ヴ
イシヤスのヴィシヤスか？」

「悪いとか邪悪とか、そんな意味だね」

「ヴィシヤス・サークルで悪循環ってことか。成程ねえ……。だが、
いたちごっこと悪循環だと、若干意味合いが違う気もするよな」

「全くだね。言語翻訳の限界と言う奴さ。ない物はない……文化が
違うのだから、いたしかたない。けれどウイルスもvirusと書
くし、語呂っぽい物は合いそうだ。何にせよ、インフルエンザウイ
ルスも風邪も、うがい・手洗い・規則正しい生活で大半は防げるも
のさ」

「横ストライプのウィンドブレーカーも忘れずにな」

「そのジョーク、本当に下らないから他のところで言わない方が良
いと思うね」

「ツボってたくせによ」

駄話にそこで切りが付き、お互い食事に専念し始める。パンを食
べ終わった鬨は、今度はパック牛乳をのんびりと飲み始めた。僕の
弁当箱もあらかた空になり、にわか午後の授業へ意識が移行し始
めたあたりで。

「ね、ねえ……あの、二人とも……」
声を。

かけられた。

二人してそつちを見ると、それは珍しい相手だった。

「おう、一文字。どうした？」

掌一文字。

身長は平均かそれより少し低い程度だが、体重の方は僕や鬨を大きく上回るだろう。ふくよかな体躯　デリカシーの無い呼称を使えば、デブと言う部類だ。眼鏡はかけていないが、小さめの目がおどどと、彼の気弱そうな性格を良く表している。ただ、体質なのか髪だけは良質で、大した手入れはしていないとは本人の言だが、ほど良い光沢とサラサラ感を纏って掌君の頭の上に鎮座している。奏手あたりが聞いたら、ずるい・もつたいない・私によこせ、と憤慨するだろう。あいつの癖っ毛は、寝不足と湿気が重なると、手をつけられない状態になってしまうから。

ちなみに掌一文字君と僕とは、そこまでの交流はない。言葉を交わしたことは何度かあるが、仲の良い友人と言う程では、とてもじゃないがない。鬨の方も、普段捌くように付き合っている人間の内の一人ではないのだろう。

それなのに何故？

ジョークでも言いに来たのだろうか。

太い両手の指を腹部のあたりで交差させながら、掌君は言った。

「あの、二人とも……ふ、二人にそ、相談したいことがあるんだけど、いいかな……」

「はあ？」

「相談だつて？」

僕と鬨は、思わず顔を見合わせる。確認するように掌君の方を見やれば、彼は落ち着かなそうに頷いて見せた。

「こ。ここ、古里井さんのことで……」

こりい おみなえ
古里井女苗。

その名前はもはや、この紙燭灯高等学校には属していない。

と言つのも、ちょうど一週間ほど前　僕が響基さんの葬儀に参列し、学校を休んでいた時に、彼女は引越してしまつていからだ。少し奇妙な話ではあつた。親御さんの都合だろうか、かなり突然に引越しが決まつたらしく……親しい友人達も、その日まで引越すことを知らなかつたらしいのだ。先生曰く、東北のどこかへ行かれた、とのことらしいが。

古里井さんは垂れ目がちでおりとりとした印象だったが、利発そうな雰囲気も持つていた。セミロングの黒髪を、よく小さな装飾のみの色つきピンで留めていたのを覚えている。物腰は柔らかで他人に対して優しい性格。もし粗悪な校風であるのなら、いじめられてしまふような小動物的な彼女だったが、幸いこのクラスでは男女問わず人気があつた。

まあ、有り体に言えば、可愛らしい清純系女子……そんなところか。

「で、その古里井さんがどうしたんだよ」

昼休みは終わりかけだったし、掌君も人が多いと話しづらいたろうと言つことで、僕等は放課後まで待つた。その木曜日は三人とも部活動　闘は卓球部、僕はパズル同好会、掌君は確かコンピューター部　が無かつたので、教室が空疎になつてから話を聞くことにした。

掌一文字君は言う。

「こ、古里井さんが、消えちゃつた……んだ」

「はあ？　消えたあ？」

なんだそれは。

僕もそう思つたが、これ見よがしに首をかしげて見せる闘に、掌

君は困ったように首をすくめてしまった。仕方が無いので、僕の方から話を引き出すことにする。

「ちょっと待つてくれないかい、掌君。順を追って話してくれないと、相談にならないよ。まず、彼女　古里井女苗さんは、先週引越したはずだけれど。そのことは知っているよね？」

「う、うん……いや、その……別に引越したから消えちゃったって言うてるんじゃないかと、引越したところから消えちゃったって言うてるわけで、あの……」

「はつきりしろよな、一文字。ちんぷんかんぷんってやつだぜ」

「漢字で書けるかい、鬨。ちんぷんかんぷん。そんな風に君が怖い顔でせつついたら、掌君だって話せるものも話せないさ」

「……おう」

鬨が引き下がる。

ちなみに、書き方はいくつもあるけれど、一例としては珍粉漢粉だ。

「……で、どういった事情なんだい？　確かに引越した状況が、少しばかり不思議だって話は聞いているけれども」

「そ、そうなんだよ！　不思議だと思って、えっと、ぼくも調べてみたんだ、けど……」

「けど？」

「どうも……どうも、引越し先には、誰も住んでない……って言うか、住所がほとんどでたらめ、みたいで……」

「古里井さんの行方が不明瞭だと」

「う、うん。それが言いたかったんだ」

掌君は、意図が伝わって安堵したのか、頷いて見せた。

対して鬨は肩をすくめてから、僕にノートの切れ端を押しつけて、掌君の方を向いた。

「確かに話自体はおかしなことだと思っけれどよ。それをなんで、俺たちに相談するんだよ？」

ノートの切れ端には、『陳腐乾布』と書いてあった。

どんな乾布なのだ。摩擦するのか。

「それは……あのう……。二人って、何だか、凄そう、だから……」
「はああ？」

なんなんだそれは。

僕もそう大いに感じたが。ほとんどチンピラみたいに掌君へ詰め寄る鬨を見て、我に返った。仕方が無いので、またもや僕の方から話を引き出すことにする。僕が引き出す役、鬨が睨みをきかせる役って、取り調べかい？

「う、うう……」

「掌君、何が凄いと感じたんだい？ 別に僕等はホームズとワトソンがごとく、ベーカー街に居を構えているわけじゃないんだけれどさ。事件らしきものを解決したことはないはずだよ」

「そうじゃなくて……ふ、雰囲気、って言うのかな。続末のその顔も……」

「ケロイドって言うんだぜ。文句あるか？」

「ひ、いやっ！ ごめん、そんなつもりじゃ……」

「鬨。君そろそろ面白がってるんじゃないかい？ 可哀そうだし話が進まないよ」

「おう」

「まったく……」

僕がかぶりを振る。

遠慮がちに指摘されたところで、今さら気にもしないだろうに。

ましてや相手はクラスメイトだ。今さら過ぎるんだよ、鬨君。悪い子だ。

さておき。

「それで？」

「えっと……、続末って、その……火傷の痕もあるのに……みんなと打ち解けてて、凄いと思うんだ……。と、時鏡もさ。あまり話したことない、けれど……あの、じ、自分の？ 自分の世界を持って……。で、で、二人は何て言うか、他の奴らみたいに……な

んだ、一緒にいない？ 二人だけの世界って言うか」

「やめる気持ち悪い」

「僕もその表現はやめてほしいな」

なんか似たような対応を、最近した気がするな。

嫌なデジャ・ヴだ。

嫌過ぎるデジャ・ヴだ。

三度目はないことを祈る。

「ご、ごめん。良い表現が……」

「群れてない、ってことかな？」

「あ、それ。そんな感じ。えっと、二人は他の奴らみたいに……群れてない……。孤高、とか」

「ただ単に浮いてるだけだと思うけれどね」

「変人な謡依と一緒にすんなよ」

「地球上に住まいし遍く全ての生物にそう評されたとして、君にだけは言われたくないなあ、鬨。君も十分変わり者じゃないかい？」

「なんだって？ 言うに事欠いて俺を変人扱いしようってのか？」

「一文字の話をちゃんと聞いてやってくれよ。俺はみんなと打ち解けてる一般人だぜ」

「君こそ良く聞いてなかったのかい？ 掌君に失礼じゃないか。君はもつと同胞たるクラスメイトに敬意を払うべきだと思うね。鬨も孤高だとか、正しくは孤立だとか、言われているじゃないか」

「孤立とまでは」

「あ、あの！」

おっと。

掌君から制止がかかった。危うくメインゲストを放っておいて番組進行をしてしまうところだった。これでは視聴率が稼げない。じゃない。取り調べてたんだった。と言うわけでもない。そうそう、えっと、それで何だったか。

「悪いな、一文字。謡依が変な奴で」

「こちらこそ悪いね、掌君。鬨がもう少しましな奴だったら」

「……………」

「冗談さ。お互いにね。そうだろ、鬨？」

「おう。そう言うことにしといてやるさ。んで、結論聞いてないぜ。なんで俺たちなんだ」

「うんと……二人だったら、ぼくのこと……わ、笑わないでくれると、思ってた……。い、言いふらしたりしないだろうって」

「あー」

「成程」

僕と鬨、二人して首肯する。納得の理由だった。

まあ、結局凄いだとか言うのは誤解でしかないのだろうけれども。僕にしても鬨にしても、噂を広めたり、陰口を叩いたり、その場にはいない人間を揶揄したりしてまで、他人のご機嫌をとろうなどとは考えない人種だ。

その点で、掌君の判断は正しい。

……に、しても。彼の話はやはりいくつか、すんなり了承しがたいところがある。

「しかし一文字よお。まあ……そこまでは良いぜ。俺も謠依も、この話を殊更吹聴したりはしないだろうし、お前の妙な必死さ、真面目さは伝わってきた。別にからかつてるわけでも、罰ゲームでこんなことさせられてるんでもねーんだろ。でも気になる部分があるんだな」

「な、何？」

「警察だよ。ケーサツ。俺等がない学生ぼつちとは比べ物にならないほどの組織力、機密性、そして実力を持った機関があるんだぜ。何故、警察のおじさん達に任せないんだ？ 何のために俺達の父ちゃん母ちゃん、税金払ってるんだよ」

俺にはもういけないけれどな。

なんて、そんなひねた台詞を吐くほど、鬨は悪い性格をしていない。が、言っていることはもつともだ。もしそれが異常事態であるなら、少年探偵団なんか結成してない、ましてやSOS団ですら

ない僕等より前に、警察へ行くはずだ。

「い、行ったよ……。け、けど、ほとんど取り合ってもらえなかったんだ……」

「んー、成程、そうか」

闕は軽く、僕の方へ目配せをした。

「まあ、そうだろうね。地方警察じゃそんな、他県にまたがった事情にまで詳しいわけじゃないだろうし。引越しをすると報告はしつかり入ってるんだから、事件として扱うのも難しいだろうね。何十件も似たような話が報告されているのならまだしも、だ」

「うん……。きっと住所の報告間違いとかがじゃないか、って」

「けれどそうすると、もう一つ不思議な点が出てくるんだよね。掌君」

「え、な、なんだろう……」

僕は闕の方を顔だけ向けて、自分を指さしてから、手をひらひらと振ってみた。

闕は闕で、眉根を少しよせて見せたが、まあいかと諦めるように首を傾けてみせた。

「悪いな。だが気になっちまって不眠症になっちまったら困る」

「……？」

「お前、なんでそんな必死なんだよ」

「う……………」

俯いてしまう掌君。

闕が尋ねてくれたので、僕も訊きやすくなった。いや、返答を半分くらいは予想できるんだけれどね。そしてそれを訪ねることの無粋さも。それでも僕等が クラスというコミュニティから外れかけてる僕等が動くこととするのに、建前のような動機が欲しいのだ。

「普通だったら、警察の方に断られた時点で引き下がるだろうしね。元クラスメイトとは言えども。そもそも、わざわざ引越し先の住所を確認しようとしている時点で、不思議だよ」

「まだ一週間しか経ってねーんだからな。同窓会にしちゃ早すぎる」

つてのはいささか無念が過ぎるよねえ」

「なあ？」

「だろう？」

「あ……、ありがとう！ 続末、時鏡！」

ここで鬨は、おどけるように笑ってみせる。

「かつつか。お礼を言うのはまだ早いぜ。めでたしめでたしとまで言えるようになったら、聞かせてくれな」

「労働報酬ってことだね」

「う、うう、は、話して良かったよあ……ふ、二人とも……」

「つか泣くな！ 鬱陶しいだろ！」

「あははは」

珍しく照れた顔の鬨に、思わず笑ってしまう僕だった。掌君は何に感動したのか（と、とぼけて見せるのは精一杯の自制だ）、本当に涙を流してしまっているようだった。面倒くさい話だが、悪い気はしない。

僕も鬨も、そこまで純粋に他人を好きになったことが、まだ無いのだろうから。

一種の憧れ。一種の願望。願わくば、彼の思いが無駄にならないでほしい。

青臭くて仕方ないけれども、そのくらいは良いだろう？

さて。

僕は手のひらを鳴らす。

「とりあえずは、情報を集めないとな」

「当たるべき場所はどこだろうな、謡依？」

「まずは先生方。そして仲の良かった女子達だろうね。どちらも手ごたえなしの場合、市役所やらの公共機関に手を出すことになる」

「そうか。じゃ、先生側頼むぜ。お前、先生受けは良いはずだろ」

「物怖じしないだけだと思っつけね。なら、女子関係は君に頼むさ、鬨。色男だろう？」

「お前それは馬鹿にしているのか？ 俺の顔を捕まえてよ。まあ……」

…女子つつーと晦日あたりからか。あいつ女子の話題には詳しいだろっからな」

「ぼ、ぼく……並尼さん苦手……」

遠慮がちに掌君が言う。

鬨は彼の肉付きの良い頬を、掌でぺちぺちと軽くはたいた。

「だから俺等が請け負ったんだろ。安心しろ。あいつが一文字を馬鹿にしたら殴つてやる」

「な、並尼さん、女の子だよ……？」

「関係あるかよ」

「鬨はフェミニストじゃないからね。それじゃ、明日から活動開始で良いかな？」

「うーっす」

「あ、う、うん……」

僕等が帰り支度を始めた、その瞬間。

ガタツ！

「!?!」

「!」

「うお!?!」

おかしな、音がした。

全員がどきつとして、音のした方向を向く。

掃除用具入れだった。

掃除用具入れの扉がきい、と開いて、中から……。

「……千々泡さん？」

「おい切子！ そんなところで何やってんだ！」

千々泡切子。

僕等が群れないと表現されるのであれば、彼女は間違はなく『浮いている』としか表現できないであろう。ショートカットのヘア。

何処を見ているか分からないまなざし。それは彼女が、涼やかで切れ長の目である、と言うのもあるが、何を考えているのか外からほとんど推察できないからこそ、そう感じさせられる。焦点があつてないような、不透明な印象。両眼の下に、頬へまたがるよう三つずつ、ほくろが縦に並んでいる。

美少女のようであり。

人形のようであり。

そして宇宙人であるかのような。

学年 いやさこの学校一の、変わり者生徒。

堂々とここに登場、だった。

「衛生環境を保全・持続するべく、恒常的に毎日行われる伝統的行為、それは公平さを期し効率化を狙うべく、予め決定された割り振りを元に、生徒達が交代で行う すなわち掃除当番と称されし機構である。私は正に今日この日、一週間における第五日目 日曜日

を第一日目と仮定した場合であるが 木曜日の担当であったため、完了させるべきその任務を遂行したのち、使用した諸道具を片付けるべく所定の地点 つまり掃除用具入れへ近づき、次いで私的な目的を達成すべく、他の一般常識に照らし合わせて不自然とされない行為を偽装しつつ、木箱の中へとその身を隠密させたと言うことである」

彼女は言った。

一息で言った。

わけがわからなかった。

「え、ええ、え？ えっと？」

「ああん？」

「つまり……僕等の話を盗み聞くため、掃除が終わった後、道具を片付けるふりをしながら、用具入れの中に隠れた……ってことかい？」

「否定する要素は見当たらない」

何やってるんだ女子高生。

掃除用具入れに好んで入り込む女子高生なんて、聞いたことないよ。

「ややっつっこしいってんだよ！」

鬨が声を荒らげて突っ込みを入れた。

漫画だったら、吹き出しで攻撃ができただろう。

「加えて何盗み聞きしてんだ！ 殴るぞ切子！」

「懸念には値しない。私もまた、掌一文字氏、並びに古里井女苗氏の個人情報については黙秘を決め込む。万が一私がこの約束を破棄したところで、諸氏はこれを信用することはないだろう」

「千々泡さんの言うことなんか、誰も聞いてないってことだね」

「否定する要素は見当たらない」

「……だあつ、そうかもしれねーが……」

出鼻をくじかれたからか、それとも殴ったところでどうせ無駄だと思っただからか、鬨は諦めたように近くの机へ体重をかけた。掌君の方を向いて、顎をしゃくる。

「おい、一文字！ お前は何かないのかよ、このへんてこりんな女に対してよー！」

「え……？ えつと……、ち、千々泡さん」

「いかなる貴君の質疑にも応答する用意がある」

「……な、なんでばくの話の聞こうと思っただの……？」

「貴君等の食事、つまりここに於いては勿論、先の、一日に於いてその中間とされる時間帯になされる栄養補給 通称されるところの昼食時。その会話を耳にしたからに他ならない」

僕はいい加減ため息をついて。先回りをした。

「僕等の昼休みの会話に興味をひかれた、ってことね。とんだ野次馬根性だねえ」

「否定する点が一ヶ所存在する。私は馬ではない」

「謡依は本当に動物が好きだな」

「そこで君は千々泡さんに乗るのかい」

やれやれ。僕は手のひらを肩まで上げ、首を大げさに振った。

オーバーアクションもとりたくなるというものだ。

「それではいかなる応答義務も、もはやこの場にはその存在を残してはいないと見なして宜しいか」

「はいはい。質問はもうありませんよ。決して言いふらしたりしないでくれよ」

「契約の有効期間は無期限とする。私は然るべき生活圏へと移動を開始しよう」

「お疲れ様。帰り道気をつけてね。明日また学校で」

「否定する点が一ヶ所存在する。私は表現を必要とするほど疲労していない」

彼女はそう言って、鉄面皮のような顔で頷くと、鞆を持って教室を出て行った。

見送る男子三名。

「ややあつて。」

「……帰るか」

「そつだね」

「う、うん……」

我に返った僕等は、校舎を後にした。

第一幕 子守唄のように。 3

次の日、金曜日。活動 古里井さんの行方搜索を開始した。

僕の担当 先生方への聞き回りの結果は、惨憺たるものだった。誰に聞いても、既出の情報より建設的な物は、何も得られなかった。数字で言えば零だ。やる気がざっくり削られるのを感じてしまった。先生方を恨むとか、自分の無能さを呪うとか、そう言うのではなく……悪いことはしてないのに、掌君に申し訳ない感じだね。

手順としては二段階。

一段階目は、普通に古里井女苗の引越し先を聞く。このこと自体は難しくはない。もちろんご存知な先生方と、ご存知でない先生方がいらっしやり、大半は後者に属す。彼らは登録された情報を、わざわざ確認しようとしてくれたりする。が、その場合、待っていたところで得られる情報は一緒だろうし、複数の先生に当たっていることが分かってしまい、話が大きくなりかねない。ので、そんなそぶりが見えたところでそれとなく断っておく。

ここで新しい話 別の引越し先が得られたのなら良かったのだが、世の中そんなに甘くはなかった。

第二段階目は、その引越し先は存在しなかった、と言うことを告げる。これはまあ、余計に勘ぐられると面倒くさいので……間をおいて調べてみたふりをするとか、実は彼女から物を借りたままで既に調べてみたのだ、とか。適当に誤魔化しつつ（こういう手八丁口八丁は得意分野だ）、話を引き出す。

以上、大方今日学校にいらっしやる先生 少なくとも、二年の授業を受け持つてらっしやる先生方には全員、当たっては見たのだが。

無駄足だった。

無駄をつぶすと言う意味で、無駄足ではなかったけれど。

けれどやはり、古里井女苗の行方をつかむと言う意味では、無駄

足だったろう。ここまで聞いて回るのに要した時間は、登校直後から五時限目後の休み時間が終るまで。心中で落胆しつつ、本日最後の授業を受けるべく、教室へ向かった。

「とつきかつがみー」

教室に入った瞬間、そんな風に促音を交えて、僕の名字を呼ばれた。

入口付近の女子だった。

「やあ、並尼さん」

「続末から聞かされたんだけどさー。なんかやってるらしいじゃん？ 珍しいよねー。ウツソ・マツジ・シンジラレナイ、ドーテイが許されるのはショーガクセーまでだよー、キャハハハハハ、って感じー、なんだけど。あ、時鏡ってドーター？」

「挨拶代わりに面白いことを訪ねてくれるね。そこでイエスと答えれば、驚き桃の木山椒の木、君自身がプレゼントになってくれるって仕掛けかい？ ありがたいけれどそれはお断りさせてもらうよ」「ぷっ。何それー。時鏡ってホント変な奴だよー。そんな台詞フツー思いつきもしなければ、吹き出さないで言うのもムズイっしょー」

ケタケタと笑う。

こう言う会話運びは彼女と何度か話した経験上、少しの危なげもない。

並尼なひに晦日みそか。

ポニーテールのヘアスタイルは、進学校である紙燭灯高校ではかなり珍しいことに、黒髪以外に染められている。ほとんど金色に近い茶髪。その茶髪やら、化粧やら。おそらく厳密に生徒手帳を参照すればわかるであろう、校則違反の数々。女子にしては高めの身長。不良少女と称されてやまない彼女もまた、教室に埋もれようの無い特徴の持ち主だ。

性格は、先の発言からわかるよう……頭の悪そうな、ノリの軽そうな、インドア派が恐れを抱いてしまうような、ある意味普通で粗

悪な造形をしている。しかしその実、成績は上位に食い込んでいたり……などと、愉快的設定も持ち合わせていない。見た目の通り、万年最下位争いにいそしんでらっしゃるようだ。何故この学校にいるかは皆の疑問の種である。

ただ、顔は広く人望は厚い。

何故か。知ろうとも思わないけれどね。

「でー、時鏡はセンコーから話聞いてたんだっけ？ 5963だねー」

「労いどうも。残念ながら収穫は無しだったけれどね」

「そうだったか、謡依」

鬨が僕を見つけて、近寄ってきた。

「晦日の奴も役に立たなくってな」

「はぁー？ 何それ、せつかくおみっちゃん探しに協力してあげよーと思つてたのにいー。続末つてばあり得ない」

「ふざけんな。お前は情報持つてねー時点で用済みだつての」

「ふーん、E-YOに利用して捨てるんだー。ぶーぶー！」

「盛り上がっているところ悪いけれど、授業後にしないかい？ 六限目が始まるよ」

「マジすか。休み時間延ばしてほしいんだけどー」

「五月蠅え、席に着きやがれ、不良女子高生」

「ちえー」

各自、席に着き、しばらくしたところで授業が開始された。

授業中。

数少ない、そのままの教室で行われる現代国語。日本文学についての考察をしたり、読解力を鍛えたりする授業。登場人物の気持ちを推察したり、当時の社会情勢と作者の境遇を照らし合わせてみたり、はたまた漢字類の知識を増やしたりする。

変わり映えのない授業風景。

目新しい事のない生徒発表。

退屈まぎれに、古里井女苗の行方について考える。

人間一人 いや、家族ごとで彼女は核家族だったはずだから、三人 の、消失。突然の引越。何の事情があつてのことだろうか。まさか本当に、住所の伝え間違い などと言つことなのだろうか。そんなことがあり得るのだろうか。

ま、あり得るだろうな。

けれどそれを考えてみても、今は仕方ない。

別のケース。登場人物の気持ちを推察してみましよう、だよ。

例えば……引越し先を偽らなくてはいけない状況……。一家そろつて借金取りに追われていて、それで姿をくらませた いやいや、ドラマでもそんな設定はないだろう。もしくは、引越しの最中に何かしらの事故に 会つたのなら、ニュースで流れているのだろつし、そもそも引越し先が無かつたのだった。やはり、意図的にこれが行われたのなら、目を逸らす……隠れる、偽装工作であるとしか考えられない。

何のために。

しかも調べられた時点で、怪しまれてしまうと云うのに。……ならば、調べる人間がいらない、と踏んでのことだろうか。いやはや、それはずばらすぎるね。闘じゃないけれど、その内に同窓会とか……そこまで行かなくても、親せき筋とか。調べる可能性のある人間は、いくらでもいる。となると、短期的な処置である と言つ、ことか？

一時的な行為。

急場しのぎか。

そんな偽装工作に、どのような意味があると言つのだろうか。そもそも 古里井家が行つたものなのか、これは。学校への引越し申告は、あるいは古里井家に間違いないかもしれないが、誰かに脅されて、と言つケースは……。

……阿呆らしい。

僕は視線を泳がし、机に向かって息を吹きかけるようにした。

そんな大事件にそうそう出くわしてたまるものか。

大体そこまでの物であるなら、僕等がせこせこ蠢いたところで、事態は何も揺るがないだろう。搜索を開始した直後からそんな可能性を探ってみても、くたびれるだけだ。骨を折ってしまったら困るとりあえず、手近な可能性から消していこう。

それしかないな、と再確認。

ほどなくして授業が終わった。

先生が教室を出て行き、教室中がざわめきに飲み込まれる。人間が数十人も集まると、それら発言は言葉ではなく、雑音の集合体なんだなあ、と感じる。同時に、そんな中でも目標の声が聞こえる人の言語認識能力　カクテル・パーティ効果と言ったかな、などと思ったりもする。

掃除当番たちの手早い行動。

かなり適当な感じで床を掃いたりする様子を見ながら、昨日の干々泡さんを思い出しつつも、探したりはあえてしない。掌君は……うん、どうやら今日も待機していてくれそうな雰囲気だ。僕も支度を済ませてしまおう。

……さてはて、今日はどうしたものか。

今日は金曜日なので卓球部があるはずだ。

「鬨、部活は良いのかい？」

教室の人間がまばらになっても移動するそぶりのない鬨に、僕はそう訊いてみた。

「ああ。今日は休むってことにしておいた。頭が痛くてな」

「本当かい？　保健室に行った方が良いんじゃないかな」

「仮病だよ。方便とも言っうな」

「ネ、ネ、ホーベンって何？」

「目的のための手段。転じて、目的を達成するために良かれと思つて吐く嘘。そのくらい知っておけ……っておい晦日、なんでお前まで残ってたんだ。さっさと部活行けよ」

「残念でしたー。ウチ帰宅部だかんね」

「じゃ、とつとと帰れ」

「さつき言ったじゃん。ウチもおみつちゃん探しに協力するってー。させるよ」

「おい謡依。俺、本当に頭痛くなってきたんだが……」

「並尼さんの担当は、鬨に任せたよ。なあに、女子の意見を聞く手立てが出来て良いじゃないか」

僕は軽く笑って、そう言ってみた。

真面目な話、高校男子だけでは出来ることに限界があるだろう。女性の協力者がいると言うのは悪くはないはずだ。並尼さんがその対象として適当であるか、なんて懸念を別にすれば。

助け舟らしきものを出した僕へ、彼女がブイサインをして見せる。

「おー、時鏡。話わかるジャーン」

「本気か、謡依？ 晦日は頭が弱い女だぜ。その弱さたるや、ヘルメット無しで外は歩けない。通称ローラーブレード女と呼ばれているほどだ」

「その発言は滑りすぎじゃないかい、鬨」

「おう」

「ちょ。この人たち何言ってるんだか良くワカンナインですケドー。翻訳プリーズ」

ちよつと高尚過ぎたか。なんて。

はたから聞いていて理解されないジョークに、大した価値はない。そろそろ本題に入るとしようか。

「まあ……、並尼さんの申し出を歓迎するか辞退するかは、掌君次第だろうね」

「……それもそうだな」

「たなごころあ？ は、なんで？」

三人して、教室にぼつねんと残っている掌君の方を向いた。彼はなんだか、視線に圧倒されたかのように、怖気づいた顔になってしまふ。僕と鬨はとりあえずとしても、並尼さんのことが苦手だと言っていたしね。

彼から切りだすのは難しいと察したのか、鬨が口を開く。

「一文字。晦日に協力してもらおうか？」

「え、えっと……」

「情報収集の幅が広がると言う点で、並尼さんの参画は有意義だと思うよ。ただ、そうなると思情を一通り彼女へ説明しなくてはならない。それをよしと出来るか、ってことだね」

「うん……っとお……」

「は？ は？ なーに話してるーんすかー？ マジ状況読めないんですケド」

きよときよととする並尼さん。金髪ポニーテールがせわしなく揺れる。

並尼さん担当に任命された（了承したかは知らないけれど）鬨が、面倒臭そうに首をかしげながら彼女への説明を果たそうとする。

「つまり、あー……、晦日。お前は秘密を守れる女か？」

「はあ？」

その切りだし方はどうなんだい。

とは思ったけれども、突っ込まず。彼女のことは鬨に任せて、僕はそれとなく掃除用具入れを開いてみる。

がこ。

誰もいなかった。

それはそうか……まさか千々泡さんも、二日連続であのような奇行に走ったりはしないだろう。今日は彼女、掃除当番ではなかったはずだし。扉を閉める。

鬨たちは、と言えば。

「いいぜ、なら指切りだ」

「マジで言ってるの？ 高校生にもなつて指切りとか、ぷぷーっ」

「ああん？ 知らねーのか指切り。そんな馬鹿な奴に協力してもらうわけにはいかないな」

「知ってんに決まってるでしょー。舐めんな。受けて立ってやる」
指切りゲンマンを始めていた……どんな流れだよ。

掌君は突っ込むわけにもいかず、何だか大変居心地悪そうに傍観

をしていた。彼に構うことなく、どうやら二人は本当に指切りをするつもりらしい。やがて二つの右小指が、がっしりと絡まりあった。せーの、と掛け声を闘がかけて、二人で高らかに歌い出す。

「ゆっびきつりげんまーん」

「うっそついたら」

「殴る」

「ぶっ」

「指切ったー」

「待って、続末待って……マジあり得ないんだけど……何、殴るって……」

「んだよ」

妙なツボに入ってしまったのか、おなかを抱えてぶるぶると震えている並尼さん。

しかし、殴るとは短絡的だなあ、闘君……。可能すぎるし。本当に実行しかねないんじゃないか。千回殴るんだろうか。オラオラ言いそうで、ちよつと見てみたくはあるけれど。

少しの間の後、彼女はとりあえず一通り笑い終えたらしく、

「あー、チヨー笑った。不意打ちやめてよねー」

と、目じりを拭いながら言った。

ちよつと拗ねたみたいなの顔をしつつ、闘は応じる。

「下らねえことで笑うなよな。受け狙ったわけじゃないんだ」

「落ち着いたみたいだね。いいかい？ それじゃ、事情を説明しよう」

ここでようやっと、口を挿むタイミングを得た。どうやら闘は並尼さんと納得行くだけの契約(?)を済ませてくれたようだし、僕が説明してしまった方がやはり手っ取り早いのだろう。掌君の前で彼女に一連の流れを聞いてもらうことにする。

長い話ではないので、数分で内容自体は終わった。

「……………」と言ったわけなんだけれどね。協力してくれる気はあるのかい？」

「ふーん。スゲーじゃん」

「すごい？」

何がだろつか。

「うん、スゲー。フツーそっこまで人好きになれないと思うよー。しかも、ちよつちストーカーっぽい気はするけど……掌、何つーの？ 自分で動いてる？ じゃん。ミヨーに髪質良いだけの暗いオタクだと思ってたケド、少し見なおしたわー」

「え、えうん、と。ありが……とう……」

どぎまぎとしながら、掌君は応える。当惑しているようだ。

実を言えば、僕は彼女の反応が意外ではあった。勿論、掌君を好意的に受け止めてくれている点で、言うことはないのだけれども。並尼さんの普段の印象から、なんとなく彼のことを笑つか、気持ち悪がるか、すると思っただの。

意外そうな僕の様子も見て取っただろうか。染色された髪をいじりながら、弁解するように彼女は言った。

「あー、えつとね。ホラ、そこらへんの奴らさー、真面目に生きてないっつーか。いやマジなんだろうケド、奴らからしたら。体力温存してるってゆーのかなー？ 手え抜いてる？」

「手間を惜しんでる？」

「そそ、そんなカンジー。そんなにエネルギー保存しといて、いつ使うつもりだよ、みたいなの？ なんとなく生きてやがるってのかな。や、ウチも人のこと言えないんだけどネ、へへ。……だから奴らの詰まんなさが分かつちゃって、ヨケーウゼーってカンジよ。アレ、必死じゃないのかなー。必死にしても、前向きじゃないっつー？」

「成程ね」

言いたいことは何となくわかった。

現状維持の延長線上、転落の恐怖ゆえの頑張りを指してるんだろ。切り開こうとしているのではなく、逃避してすりつくかのよくな頑張り方。例えば、目的のない……将来の不安から打ち込むよ

うな勉強。それを拒否して見せようとして、あるいは彼女のような不良ぶった　言うなれば幼稚で単純で強引な方向転換になったりする現状。

そのどちらとも違うものを、掌君に感じたんだらうか。

「続末も時鏡も、キョーリヨクしてあげてるわけじゃん。ムシヨーホーシってやつじゃないの、それ」

「無償奉仕って漢字で書けんのかよ」

鬨が良くわからない突っ込みを横から入れる。

「書けるわけないでしょー、そんなのー。ヒトが折角カンドーしてあげてるつてのに、邪魔しないでくれますかー」

「そうかよ。悪かったな」

どうしたんだ鬨……、また照れているのか？

彼はフリーな時間にしては珍しく、椅子を引いて席に腰掛けている。姿勢は悪いけれども。

「ま、そんなトコ」

並尼さんは勝手に納得して、勝手に話を閉じた。

「なのは良いけれど、結局協力してくれるのかい？」

「おー、するするー。さっきまでのジュー倍やる気でキョーリヨクするわー。おみっちゃんともうチ、仲良かったしねー。ツレが行方不明つてのに、手伝わないわけにはいかないっしょ」

「どうも。掌君もそれで良いかい？」

「あ、うん……」

「よつろしくねー、たなごころー」

「よ、よろしく………おねがいます………」

出典不明のポーズを取る並尼さんに、尻すぼみになりつつ応じる掌君。彼は彼なりに、褒められたことと思うところがあつたのだらう。少しは打ち解けたみたいで良かった。

「と言っわけだね………鬨、まずは並尼さんから改めて、古里井さんが引っ越す前の状況を聞くと言うことで」

「おいあれ」

遮るように教室前方を指した鬨につられて、僕も含めた全員の視線が前を向く。

教卓が動いていた。

と言うより、こちら側に 教壇から、最前列生徒の机へ向かって 教卓が倒れ込んで来ていた。

さながらスローモーションのように……そして、派手な音が響く。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………え、何？」

三名沈黙。一名混乱。

倒れた教卓から、女子高生の物とおぼわしき足が、間抜けに突き出していた。続いて手、両腕がよきつと教卓から生え、ふちを掴んだかと思うと難儀な様子を見せつつ、やがてその上半身を起き上がらせることに成功した。

誰であろう。

言うまでもなく千々泡切子である。

僕ら三人が混乱せずに済んだのは、教卓が揺らぎ始めたあたりから予想がついていたからだ。

「……………身体の主に背面と肩、頭頂部の神経が微々たる損壊を訴える程度に刺激されたのを、私は感覚している」

「痛かったのかい」

「否定する要素は見当たらない」

「ちょ……………、千々泡……………、アンタ何やってんのそんなトコで？」

「貴君等の会話を秘密裏に拝聴すべく我が身をこの木箱 学生等にその知識を教授せしめるがための存在、つまり教諭等がより効率化を図るべく卓として用いる道具 すなわち教卓へ隠密せしめる行為は成功を見たが、聊か態勢の持続に艱難が生じたためこれに変化を加えようと試みた結果、過剰に狭隘たる空間ゆえに均衡を崩し、応対を講じ得ないまま今に至る」

「……へっ？」

「また僕等の話を盗み聞くために教卓に隠れたはいいけれど、バランス崩して倒れたってことだね……」

「否定する要素は見当たらない」

「お前……いや、なんかもういいわ」

「え、あー、笑うトコ、なのかな、ひよっとして？」

諦める鬨に、リアクションに迷い続けている並尼さん。

眉根を寄せたままひきつった笑顔を浮かべている。手は中を泳いでいた。

千々泡さんの変人さと言ったら、僕や鬨をはるかに超越してるものな……。彼女の突然の奇行に、一般人が対応しきれるとはとても思えない。

掌君も昨日相手をしたばかりとはいえ、困った様子でいたが、極めて常識的に声をかけた。

「ち、千々泡さん……だ、大丈夫？」

「貴君等の心情を左右せしめるには不足の事態と言えよう」

「不測の事態とかけてるわけだね……」

「否定する要素は見当たらない」

「謡依……、いちいち解説してくれなくてもいいんだぜ」

「なんかさ、うん……仮に僕等の日常が物語だとしたら、読者に申し訳ないと思っちゃってね」

「もつともだ」

そんな風に言いつつ、僕と鬨は教卓と崩れた机を戻しにかかった。千々泡さんと言うと……いつものように朴訥とされていて不透明な無表情をしていた。あれだけの醜態(?)を晒しつつ、ある意味ではかなりの度量があると言えるだろう。

僕等が机の整理を済ませている間、残りの三名は手持無沙汰な沈黙に包まれていた。

手伝つてよ。

「ふう。こんな感じかな……でさ。千々泡さん」

「いかなる貴君の質疑にも応答する用意がある」
「お前帰れよ」

鬨が容赦のない言葉を放った。
掌君がその様子に、目に見えて怯える。

「こらこら鬨。少々それは乱暴じゃないかい？」

「いや、こいつに回りにくい言い方をしても、百倍回りくどくなつて返ってくるだけだと思っぜ」

「一理あるんだけどさ……」

「否定する論拠が見当たらない。露見してしまった以上、この場に留まるべき理由が存在しないゆえ、貴君の対応に不明瞭かつ不合理な部分は不在と言えよう。服従に些細な抵抗も生じはしない」

そう簡潔に ではないが、さらりと一息で述べると、彼女は鞆を持つて教室を出て行った。

なんだ、素直ではあるのだろうか。

「……つか、あの子……何？」

「俺たちに聞かれても困るっての」

「あり得ないくらい変な子だよね？ ダヨネ？」

「そうだね……まあ、気にしないで話を戻さないかい？」

「おう」

「う、うん」

「はい」

仕切り直し。

「とりあえず、並尼さんから古里井さんの以前の様子を
ガラリ。」

教室の扉が開いた。

「……ん」

「あれ」

「……はあ？」

千々泡切子だった。

千々泡切子、再・登・場！

再々降臨と言ひ換えてもいいかもしれぬ。

「おい……切子……、帰るんじゃないのかよ……」

「帰宅後の再登校を禁止された記憶は残存していない」

「……………」

君何処に住んでるんだよ。絶対嘘だろう。

「色々思うところはあるんだけど……、あのさ、何かご用事？」

「肯定以外の応答を私は発想し得ない」

「バリエーションを使ってきたね。で、なんだい？ 聞ける範囲でなら聞くさ」

「さつさと帰って欲しいからな」

「つ、続末君……………」

うるたえる掌君に、だってそうだと言い返す鬨。並尼さんは処理速度が追いついていないようだ。

そんな彼らの様子に少しもかまうそぶりを見せず、千々泡さんは言った。

「貴君等の企て　つまり古里井女苗氏に掌一文字氏の心中を伝達すると言つ目的の下、現在移転先にその姿の確認できない彼女の行方を搜索すると言つ計画に、私　すなわち千々泡切子と称されし一個人の参画を認許して頂けないだろうか」

「……………え、何？」

「う、ううん、と……………」

「もしかして、とは、思うんだけども……………僕等に協力……………したい、つてことかい？」

彼女は頷いて見せる。

「尽力すると確約しよう」

爆弾発言だった。

千々泡切子、爆誕だった。

並尼さんの話によると、やはり。

古里井女苗は、引越しの少し前どころか、前日でさえ、その雰
囲気を漂わすことはなかったと言う。

普通に授業をこなし、普通に部活（手芸部）の活動をし、普通に
談笑し、普通に帰宅して行った　そうだ。確かにこれでは、まる
で消失だろう。消失した辻褄合わせに、引越したと言われている
ようなお話だ。

並尼晦日のネットワークは僕等の想像範囲よりもずっと広いらし
く、実に学年の女子の八割方のアドレスを把握しているとのことだ。
『紙燭灯高校二年生の姐御』と呼んでもらいたいらしい。誰も呼ば
ないと思うけれど。さておき、彼女自身、古里井さんとは随分仲良
くしていたそうなので、そのネットワークを活用して最大限情報収
集を試みてみると言ってくれた。ただし、噂が噂を呼んで大げさな
ことになるのは避けたい、と、言ったら。

「だいじょーぶ。そうゆー細かい情報操作は、ウチの得意分野だか
んねー」

……信用ならないけれど、彼女に頼むしかないだろう。

大丈夫かな。

掌君は、コンピュータ部と言うこともあつて、実はパソコン操作
はお手の物らしい。古里井女苗の子の現象と似た事件が、近頃どこ
かで起きてはいやしまいか。そのことについて調べ、整理し、分析
をしている最中だと言う。今日中に他人に見られても平気な段階ま
で情報を仕分けして、明日のコンピューター部活動時に、友人たち
に手伝ってもらうつもりだそうだ。

それは換言すれば、他人に見られたらまずい情報を扱ってるって
ことなんだろうけど。

まあ、触れないでおいた。

閑話休題。

話し合いの結果、やはり旧古里井宅の状態は確認しておきたい、と言う結論に至った。旧古里井宅のご近所さんや、彼女の親戚筋から情報を収集したいのも勿論あったが、家自体がどういう状況にあるかは興味がある。

しかし、これはどうすれば良いのやら見当がつかない　などと行き詰っていたら。

「簡単だろ。忍びこめばいい」

と鬨。おいおいそれじゃ不法家宅侵入罪だよ、そう突っ込み入れたが止まる様子を見せない。

正規の手段を取るにしても、難しいのは確かなのだ。家の内部なんてプライベートの塊だし、警察に頼んだところで市役所に頼んだところで、許可が下りると思えない。親戚筋から合鍵でも、どうにかして譲り受ければ　とも思ったが、その可能性も低い。彼女の親戚筋と言っても、祖父母程度しかいらっしやらず、またここから遠く離れたところにお住まいのようだ。

会いに行くのも大変だし、合鍵をお持ちかどうかも怪しい。

かくて青少年達は犯罪に手を染める。

実際は大分言い合いがあったのだが（半分はついて行こうとする千々泡さんの説得）、鬨の勢いを収めることはとうとう出来ず、妥協点として僕が鬨について行くことになった。

今夜決行。

鬨曰く、「善は急げ」だそうだが。善と称して構わない行動なのか、と考えると、かなり疑問が残るところだ。精々、思い立ったが吉日、あたりであろう。並べる言葉として、悪事千里を走る、なんても戒めとして添えておきたい。善は急げ、悪は走る。

事情説明終了。

以上の推移を経て、僕は旧古里井家の所在している深夜の町へ、鬨と待ち合わせに向かっているのだった。

我が家は父が某時鏡のお仕事につきつきりで、泊りがけである場合が多い。母は母で仕事はしているが、規則正しい生活が守れる程度の忙しさであるので、大抵深夜はぐっすり眠っている。抜け出すことくらいは問題なく可能だ。

鬨の方も、伯母さんとは仲が悪いわけではないが干渉しあう程べつたりでもないそうなので、抜け出しても判明はしないらしい。

ここまではさしたる問題もなく。

指定の電信柱の下に、私服の鬨を発見した。

服装描写は……女の子相手でもないし、しなくていいか。僕も鬨も全体的に暗い色をした動きやすい恰好をしていた。

「やあやあ。遅れてしまったかな？」

「いや。ほとんど時間通り　深夜の一時　最終電車直後だな」

そう頬笑み、私服のポケットからニコチンの軽い煙草を取り出す。長めの髪が邪魔になるといけないと思い、僕はこの場でくくっておくことにした。

「少し時間を置こうぜ。一本吸わせてもらっわ」

「それじゃ、僕も」

「お前のは駄菓子じゃねえか、謡依」

「ふふ、ココアシガレットを馬鹿にしないでくれ」

「はん」

知っている人間は少ないが、実は鬨は煙草を吸うのだ。決してへビースモーカーなわけではなく、恒常的に不良のごとく吸っているわけではない。かと言って、呑む、と表現されるほど洒落て吸うわけでもない。身体へ及ぼされる害について、知らないわけでもない。ならば何故吸うのだろうか。

「相変わらず君は、煙草を辞めるつもりはないんだね。体に悪いぜ。

ココアシガレットにしたら良いのに」

「そんな甘ったるい物は趣味じゃねえ」

「丈夫な赤ちゃん産めなくなったらどうするんだい？」

「俺は元から産めねえだろが」

鬨は重厚な、鈍い黄金色をしたジツポーを取り出す。

カチン、と流れるような仕草で蓋を開くと、彼の顔と手の辺りを中心に灯りがともる。相対的に、周囲の闇は濃くなつたように感じられた。

「前に言わなかつたか？」

「うん？ 煙草を吸う理由かい？」

「ああ」

「聞いたし覚えているけれど、もう一度聞かせてくれないかな」

「けっ、お前は性格が悪いと思うぜ、謡依」

煙草に火をつけ、ジツポーの蓋をまた優雅に閉じ、深く息を吸い込んで 吐き出し。

「炎の味を忘れない為 それだけだ」

くゆり、夜空に溶けてゆく煙を見つめながら、鬨は言った。

「何度聞いても恥ずかしい台詞だよねえ、それ。カツコつけてるなあ」

「五月蠅えよ。お前以外に言ったことはない」

「僕だけしか聞いたことが無い、と言うのがより一層恥ずかしさを助長してると思うんだけどね」

軽薄に笑つてやつてから、僕もココアシガレットを齧る。

知らない人のために一応説明しておけば、このココアシガレットと言うのはチョコレートの香りをつけられたラムネのようなものだ。きな粉棒を知っていたら、それに近いかもしれない。細長く、6本入り30円程度の、伝統的な駄菓子だ。

勿論僕がこれを好きな理由は、ただのカッコつけと少しの意地だ。あるいはただのジャンキーだ。

「謡依こそ、そんな駄菓子をいい歳になってまで懇意にしていることについて、恥ずかしいと思つたりはしないのかよ」

「お生憎様。そんな段階は中学に上がる前に卒業しちゃつてね」

「さぞかし可愛くねー餓鬼だったんだろうな、お前」

「まさか。僕ほど可愛い子はいなかつたと思うよ。今でもね」

「てめーは鏡とでも結婚してやがれ」

「そしたら最後には水仙にされちゃうよ」

心にもない憎まれ口をお互いに叩き合う。いつものやり取りだ。

やがて、鬨が携帯灰皿に煙草を押しこみ、こちらを向いた。

「お互い、今日は学校で大変だったな」

「情報収集はほとんど空振り。並尼さんのお相手御苦労様です。千

々泡さんにも参っちゃったね」

「来てねえだろうな、あいつ」

周囲をうかがってつてみるが、静まり返っている。

酔っ払いの一人すら、この周辺にはいなさそうだ。いたとして、

野良猫くらいのもだろう。

「いないと思うけれどね」

「安心できる情報だぜ。それじゃー……、一丁気合を入れて。今日

最後のお仕事と行こうぜ」

「泥棒の気分にするのはやめておくれよ」

旧古里井宅へ向かう。

そして到着。

旧古里井宅は、それなりに立派な一軒家の住宅だった。核家族でこれだけの家に住んでいたのなら、わざわざ引越すことはないだろうにと思う。表札ははがされていた。一週間程度しか経過していないため、はた目からは人が住んでいるかどうかの判別は難しい。夜は夜でも深夜であるので、電気が消えているのがそれほど不自然ではないし。

入口には当然のように鍵がかかっていた。

「それで、ここはどうやって突破するつもりなんだい、鬨君？」

「まあ、待て。ちょっと周り見張っててくれ」

鬨はポケットから、何やら針金のようなものを取り出した。つておい、シーブズツールと言うか……ピッキングの道具じゃないか。そんな物何処で手に入れたんだ君は。

「通信販売とかで手に入るぜ」

「本当かい。物騒な世の中だねえ」

「人が消えちまう世の中だしな。確かに物騒だ。ま、道具があつてもコツが要るんだが」

そう言つて無造作に、針金の先を鍵穴に突つ込み、やけに慣れた手つきで揺すり始める。

ほどなくして、魔法のように扉が開いた。

君はいつたい何者なんだよ、続末闖君。本当に泥棒なんじゃないのかい。

「昔取つた杵柄つてやつでな」

家宅の中へ二人してそつと入る。

「いかにして取る事になったのか、詳しく聞いてみたいね」

通りを再度確認し、音を響かせないように扉を閉じた。

内側から鍵も閉める。

この程度なら、僕にも出来るんだけどね。

「早秋と言うことで、外とあまり変わらさず冷えるねえ」

「ま、な。一軒家の広さと保温性を考えりゃ、数日以上は人が立ち入つてねえようだ」

お互いに、ささやくような小声。

「おつと、靴はどうしようかな。靴箱は備え付けみたいだけど……中には何も入っていないね。当然スリッパも無しだ」

「おら、手袋。あと靴の裏にはこれを貼るのさ。そしたら履いたまままでいい」

薄手のビニール手袋のようなものと、ガムテープを取り出す闖。

「はあん、成程ね……。いざとなつたらこのまま走りだせる、つてわけだ」

「おつよ」

玄関を上げる。

「電気、ガス、あと水道も　おそらく止められているね。通つていたとして、点けるわけにはいかないけれどさ」

「ライトは持ってきたか？」

「ペンライトがあつたからね。ちょうど良いだろう？」

「ああ。ただし窓の方には向けんよ。とりわけ、表通り側にはな」
「はいはい」

ペンライトのスイッチを入れ、足元から天井まで、ぐるりと回してみる。鬨も小さめの懐中電灯を持ってきたらしく、それを点灯させた。

「こうして見るに　綺麗なものだよね。作りは一般的な二階建築。けれどこの様子じゃ、全部回るのに対して時間はかからなそうだ」

「何も残ってない　つてのは、予想したことだからな」

「……日中なら、ライトをわざわざ持つてこなくても良かったんだけどねえ」

「冗談だろ。空き巣つてのは、潜入時と脱出時に露見する場合が一番多いんだ。人通りの少ない深夜に家主がいねえんだったら、その時に入るのが一番適してんだよ」

「そっちこそ、空き巣に例えるのはやめてくれないかな。僕等は何も盗りはしない」

「口数ばつ減らしても進展しねえ　手分けして軽く搜索しようぜ。俺は一階、謡依は二階。そうだな　十五分後にこの玄関へ集合だ」

「了解」

行動を開始した。

抜き足差し足で階段を上る。

空っぽの二階へ到達　部屋の数は、四つ程度だろうか。順番に巡ることにする。

生活感のまるでない、空虚を敷き詰めた雰囲気。長くても一週間の放置では、埃もほとんど積っていない。取り外し可能な家具は残っており、床も、壁も、天井も、何も語らない。まるで洗浄されてしまったかのような有様だ。

暗闇。

静寂。

蒸発してしまった住人。

不気味さを演出し、恐怖を誘発するには十分のシチュエーションだけれども、それにすら、虚しさを感じさせるかのような家の様子だ。

小さな部屋の……もしかしたら、古里井女苗本人の部屋だったかもしれない。もはや何もなく、他の部屋との区別すらつかなくなつた空間をライトで照らして行く内、壁紙に小さな傷跡を見つけた。何のことはない、ただの傷跡。

とは言え、この家が新品ではないことを示す　かつては人間が住んでいたことを主張する、数少ない名残りだ。

勿論僕は、こんな痕跡から推理を展開できるほどの名探偵脳は持っていない。ドアの付近……僕の腰よりやや低め、となると……焦燥に駆られた朝、焦って鞆の金具でもこすつたのだろうか。そんな感じではあるが、違う可能性も大いにある。

手掛かりとは言い難い。

ぼつつとしながら、その傷跡を撫でつつ……古里井女苗について考えてみた。

言葉を交わしたことは、多くはない。

学校の生徒全員で平均を取ってみれば、それ以上ではあるかもしれないけれど……僕にとつては、特に思い入れのあつた人間でもないだろう。記憶に残っている会話……何かあるだろうか。化学の授業だったか、模型を忘れた先生に言われて……出席簿の指運で、一緒に化学実験室へ取りに行ったような気がする。

けれども、取り立てて特殊な会話ではなかつたような。

いつものように、僕が冗談めいたことを言つて　彼女は。

「あつは。時鏡くんは……、何だか浮世離れしてるよね」

そう言つて、可愛らしい笑顔をしてくれたような気がする。

掌君が好意を寄せるのも、無理からぬ笑顔だつたらう。

斜めに構えた態度を崩さないまま、僕は応じた。

「浮世離れして浮いてるってかい？」

「なあに、それ」

「ただの面白くもない駄洒落さ」

「ふーん。うんとね、私ってほら……普通じゃない」

「それが本当だったとして、古里井さんが普通だと言うのは、周囲と仲良く出来てるってことだろうから、悪いことじゃないんじゃないかな」

「うーん、そうだとしても……、ちょっと詰まらないかな」

「詰まらない？」

「何て言うんだろ……、自分が何処にいるんだか、時々わからなくなっちゃうって言うのかな。普通すぎて、自分だけの物って……持っていない気がするの」

「アイデンティティの喪失かい。モラトリアムの最中には良くあることだよ」

「難しいこと言わないで。それってどういうことなの？」

「大した悩みでも、さしたる問題でもなく 誰にでも、僕にさえある疑問だから。自己存在の有無について、普通か、そうでないかは、あまり関係ないと思うと、そう言うことさ」

「えー、そうかなあ……」

「そうだよ。僕は変な人間だと評価されることが多いけれど、それは変な人間がそこにいると表現されているにすぎない……つまり、僕の実在との関連性はない。変な人間が在るから僕が在るのではなく、僕の行動によって変な人間がそこに観測されるわけだね」

「良くわからない……」

「社会、他人、自我に認識、それらの全てが嘘になりかねない虚像であり、デカルトが最後にはコギトエルゴスム 『我思う、故に我在り』にたどり着いたがごとく、物事の実在を問うのは非常に難しい」

「ごめんなさい、全然ついてけない」

「ふふ、今のはただの意地悪だよ。……ほら吹き吹くホラ貝の音

は、きつと古里井さんも聞こえるだろうね。たとえ離れていたってさ」

「うん」

「その音がきつと僕であり、古里井さんだよ。音は基本的に、聞くことでしか認識ができないね。じゃあ、だからその音が『在る』のか、って言うと、そこは微妙なところだ。大きく力強いほら貝の音ですら 掴めない、触れない、見えもしない、残らない」

「えっと……何かそれって、寂しくない？」

「そうかな。それでも僕等は、音楽を聴ける 謡曲を謡えるし、旋律を奏でられるし、鼓動を刻める。そして順次消えてゆくそれらの全てが、唯一取って二つに下らず、織り重なって心を揺さぶる」

「……………」

「心配せずとも、普通だったとして、君の人生の代打はいないのさ。古里井さん。この瞬間の君の存在が 古里井女苗って題名の音楽が、僕の心を揺さぶり、かような言葉の数々を引き出したってこと。たった今、時鏡謡依君にとって君はかけがえないのさ」

「……あははは」

どう言っただけか、彼女はより一層笑って見せた。

それから、何処となく儂げな表情に切り替えて。

「時鏡クンは、その内どこか遠くへ……、行っちゃいそうだよね」
なんてことを言った。

意図するところが判然としなかったので、僕は肩をすくめた。

「どんな意味だい？」

「んーん、意味なんてないよ。先生が待ってるし、急ぐ」
今もまた、僕は肩をすくめる。

まだあの時の言葉の意味もわからなければ、どうして彼女があんなことを言ったのかすらも推察できない。

何であれ、現在はつきりしていることは。

「……先に遠くへ行ってしまったのは、君の方だったみたいだね」
古里井さん

吐息のように呟いて、回想を打ち切り、他の部屋を搜索することにした。

占めて十五分後。

鬨と玄関で合流する。

「何か見つかったかい、鬨？ 二階にはNothingがあふれかえっていたよ」

「こつちもそうだけ。随分徹底した『お引越し』だったと、そう感じざるを得ない」

とつくに暗闇に慣れた目に、若干落胆した様子の鬨が見えた。

「仕方ねえ 手早く撤収するでしょうぜ」

「長居は無用だね」

外に対して耳を澄まし、小さくドアを開けて確認し、素早く外に出て、ピッキングセットで鬨が錠を落とす。通りに躍り出て、不自然ではない程度の歩調でそこから移動し、ある程度離れたところで靴からガムテープをはがす。ゴミ箱は見当たらなかったため、丸めてポケットへ。

腕時計を確認。

「うーん、始発まであと二時間からあるなあ……」

「どうするよ。この付近にネットカフェとか在ったか？」

「無いんじゃないかな。探してみようか。カラオケボックスでもあれば、凍えなくて済むんだけどね」

「そうだな 始発で帰って支度して、今日の登校 ってなるとあんまし眠れねえしな。数時間でも寝られるといいんだけどよ」

「この辺りは住宅街だけど、隣駅が確か繁華街前だったからね。最悪、ひと駅分歩けばどうにかなるんじゃないかな」

「じゃ、その方針で」

駅の方へ向けて、僕等は歩を進めてゆく。

沈黙の夜街路。電灯が観客もいないのに、文明の功績を大いに主張している。たまに人とすれ違いが、目すら合わさない。黙々と歩く。

「……しかし」

ふと、鬨が口を開いた。

「何も、なかったな」

「うん、何もなかったね」

「探し始めてまだ二日だが、本当に古里井の奴が俺等の周りにいたのかどうか　怪しくなってきたくらいだな」

「実は幻で、もしくは幽霊で、僕等は揃って催眠にでもかかっていたとでも？」

「まさか、んなことあるかよ」

「そうだよねえ」

「そうさ。はっはっはっは」

「ふふふふ……」

からびた笑い声が、闇に染み込んでいった。

「……は。……ま、そいつは冗談だとしても、不気味さは拭えないよな」

「そうだねえ。かと言って、怖気づくほどでもない。実際、まだまだ古里井家が迅速かつ几帳面に引っ越しを済まし、間違った報告を学校にってしまったと言う可能性も拭えないさ」

「拭えないところばっかだな」

「大掃除にはまだ早い時期だしね」

「何にせよ、学生様の身分で調べられる範囲は、早くも逸脱しちまいそうだな。……さっきのだって領分を侵してるしよ」

「自覚はあったんだね。まあ、そうなると　公共機関、警察様方を動かせるだけの異常さを見つけないといけない、ってことになるよね。他人の住民票を、いきなり閲覧するわけにもいかないし……」

「一文字がそのあたりはやってんのかな……。とりあえず、明日つーか今日はこの辺で聞き込みだな」

「パズル同好会が在るんだけどね」

「休め」

「はいはい」

闕はここでぐつと伸びをした。

気持ちを切り替えるように。

「よっし……。さつさとカラオケ探して歌おうぜ、謡依」

「おいおい、寝るんじゃなかったのかい？」

「いーじゃねーか。細かいこと気にすんな。そういう気分なんだよ。数曲付き合え」

「まったく、やれやれだね」

その夜、何とかカラオケボックスは見つかった。

妙に盛り上がってしまい、睡眠時間としては使えなかったが。

学生らしい生活模様だったと言えよう。

果たして、深夜の不良行為の報いは受けることとなる。

まだほとんど真つ暗な明け方、我が一家の住まう時鏡家の玄関前

に 母、時鏡声音こわねが仁王立ちしていた。

深夜の冷え込みよりも凍えそうな笑顔で、僕を迎えてくれた。

「それで。謡依くんはこっそりお家を抜け出して、どんな悪いことをしてきたのかしら？」

次回へ続く。

時鏡謡依の命運やいかに。

第一幕 子守唄のように。 4

「とう言うわけで鬨君。昨日は、深夜に高校生的懊悩に煩悶する君の、救助要請メールを受けた親友たる僕が、友情ゆえにいても立ってもいられなくなつて、急遽会いに行つて人生相談の相手をしてきたことにしておいたから、口裏合わせよろしくね」

「はあ？」

鬨は箸を動かす手を止めて、こつちを見た。

「人を勝手に言い訳に使つてるんじゃないよ。一体いつ俺がお前に相談したんだ、謡依君。迷惑だからやめてくれないか」

「冷たいなあ。昨日はせつかくついて行つてあげたつてのにさ」

「お目付け役だか何だかしらねーけど、お前の方からついて来ただけだろ。あいつの家があんな様子だったんだし、俺一人でも十分だったんだぜ」

「いやいや、実は怖がりな鬨のことだ。案外一人だったなら任務を完遂出来てなかったんじゃないかな。足とかすくんじゃってさ」

「俺に許可なくふざけた設定を増やすんじゃないやねえつての。大体」

「ほら、そこー。続末ー！ ちゃっちゃと掃除終わらせるよー」
遮るように、並尼さんから声がかかる。

「違……、謡依が俺の邪魔をして」

「言い訳乙！ 終らせないと動けないじゃん」

「ちっ……。だったら晦日、チリトリよこせよ」

「ほらよー」

午前しかない土曜日の授業が終了し、掃除が行われている僕等の教室だった。

鬨も並尼さんも今日の当番。普段さぼりがちの並尼さんも、今日はこの後古里井さん搜索活動を控えているためか、積極的に掃除に参加していた。

ま、たまにやると掃除も結構楽しいからね。

土曜日は、多くの部活の活動日だ。つまり、放課後とは言え残っている生徒も多く、教室で話し合いをするのは躊躇われる。また、例にもれずコンピューター部の活動日でもあるので、掌君はこの後話し合いに出ることはできない。

僕のパズル同好会のように休めば良い、と言うわけにもいかない。「そ、それじゃ……ぼくは行つてくるね。続末、時鏡、な、並尼さん……と、千々泡さん」

荷物をまとめ、掌君が言った。

そう。掌君は掌君で、古里井さんの消失に関連が在りそうな情報を集め、纏めるといふ作業が在るのだ。

「有益なる情報の更新を期待して待機する」

「おう。健闘を祈るぜ。……掃除も、終りでいいな」

「ゴミ捨て4649」

「てめーが行けよ、と言いたいところだが、重そうだし請け負つてやる」

「39」

さてと、鬨がゴミ捨てから返つてきて、メンバーが揃ったところで、いつの間にか数えてみれば五人もの人数が一つの目的を持っていることになる。立派な部活動レベルだ。行動を開始する。

今日の主な内容は、聞き込み。

旧古里井宅周辺のご近所さんに対して、僕等が彼女の友人として聞き込みを行う、と言うこと。つまり、このまま一同、旧古里井宅の最寄り駅へ向かうこととなる。

ファストフード店で軽く腹ごしらえ。

「消費者と提供者の効率追求の末導き出された、一つの食料品店としての在り方。それはすなわち要求を受けてから提供に至るまでの手順の簡略化、高速化を図りつつも、且つ人間生物の味覚組織と満腹中枢の十分な充足を達成せしめる処理によって実現する。人呼んでファストフード。私と言う自我を主張せし人物は、過去に於いてかの物をして食事となした経験所持していないのであるが、

如何様にしてこれに対処すべきであろうか。この面に於いて先んじていると判じられる貴君等に教授を請うところである」

「ちよつと千々泡、ウチにもわかるように言つてよ」

「どうやら千々泡さんは、ファストフード店は初めてみたいだね」

「マジかよ。お嬢様だな」

お嬢様と言うより、店員さんと思ひ疎通が図れないだけじゃないかと思つてしまつたりもするけれど……、さすがに失礼が過ぎるかまあ、こういうお店つて機会が無いと入らないしな。そしてその機会は、友人によつてもたらされるものだ。千々泡切子さんに、その手の友人が今までいたとは 想像しにくい（遠まわしな表現）。

「じゃーあー、千々泡にはモチモツツアレバーガーがオススメ。オイシーよ。01414」

「指導に惜しみなき感謝と敬意を示し、異論を挿む事無く右へ倣おう」

千々泡さんは頷き、順番が回つてきたことを確認すると、カウンターの方へ歩を進める。

僕等は何となく、特に口出しをしないでその様子を見ていた。

「御注文をどうぞー」

「モチモツツアレバーガーのセットで」

「承りました。セットはポテトでよろしいですか？」

「はい」

「お飲み物は何になさいますか？」

「ホットのコーヒーで」

「はい。640円になります。……Sポ、モチモツツー！」

後ろに向かつて注文を伝える店員さん。

千々泡さんはきつかり640円を支払った。

「えーと、640円ちよつと頂きますねー。列の横でお待ち下さいー！」

「はい。……」

彼女が僕等の方を向いた。

「……………？ 貴君等の表情から心中の動向が推察出来ない。言語表現による解説を所望するが、如何か」

実際、この時の僕ら三人の驚愕っぷりと言ったらなかった。

あいた口がふさがらない、なんて慣用句がしっくりぴったりはま
ってガタつきもしない。

「お……………おまつ……………、普通に喋れたのかよ？」

「待って……………マジ待って……………、お、お腹痛い……………マジ、あ、あり得
ない……………」

不意打ちに弱い並尼さんは、すっかり笑いにノックアウトされて
しまい、体を大きく折り曲げてしまっている。顔が見えず、派手な
ポニーテールが頭の前面から地面に垂れていた。困ったことに、彼
女の気持ちは痛いほど分かった。

僕でさえ、顔面筋肉の制御には失敗している。

対して千々泡さんの無表情さは鉄のごとくだ。

「？ 前客の仕草を元に学習し、それを踏襲することによって行為
を全うせしめたのだが、以上の動作に貴君等を破顔一笑させるべき
意味合いは含蓄されていないと思考する」

「……………そんな器用なこと出来たんだねえ」

「肯定しきれぬ部分が見受けられる。諸般の例と比較して器用とは
言い難い」

「だったら切子、お前。普段からよお、って、ん？」

鬨の服の裾を、並尼さんがくいくい引っ張っていた。

地面と会話するような姿勢のままだ。

「ごめ……………ちよ、続末……………、わ、私の分注文しといて……………ぷっ、く
くく」

「大丈夫かお前。笑い上戸すぎるだろ。モチモツツアレラでいいの
か」

「モっ……………くふっ、いつ、今それ言っつな……………」

「モチモツツアレラのセットでお待ちのお客様、お待たせいたしま

「チヨールわかんないっす」

ナゲットをつまむ並尼さん。

対して、千々泡さんがモチモツツアレラバーガーを置いて口を開く。

「仮説として古里井女苗氏が我々の既に獲得したる情報から自然に導き出せる状況　すなわち、家宅の移転が行われたとされる時日の前日に至るまでその様子が観測し得なかった事実からして、古里井家に於ける転宅は突発的なものであると推量できる。がしかし、続末闕氏並びに時鏡謡依氏よりもたらされた情報から鑑みるところ、念入りな貨物の撤去、洗浄されたと思わしき屋内等の現状から、緊急の転居ではなかったことが窺える。　以上二つの解釈は相反し矛盾する」

いつものように流暢にそう言つてのけると、彼女はまたモチモツツアレラバーガーに手を伸ばした。気に入ったのだろうか……。それにしても、モチモツツアレラバーガーって長過ぎだろう。もうこれについての記述はしないことにする。

「要するに、古里井さんの様子から引つ越しのお話はまるで寸前まで無かつたように見える。けれども、旧古里井宅からは焦って引つ越した様子は見られない。これは不思議なお話だね、ってこと」

「なるー」

「プロの夜逃げ屋でも、こうはいかねーと思うぜ」

「プロの夜逃げ屋ってなんだい。走り屋みたいに言わないでくれよ」

「プロの走り屋もいねえだろうが。豆腐屋のことかってんだよ。…

…で、まあ」

闕は早くも二つ目のバーガーに取り掛かりつつ、並尼さんの方を向いた。

「そこんところどうなんだよ、晦日」

「はっ？　ああ、走り屋？　ウチも走り屋については良く知らないケド、プロってのはいないんじゃない」

「あのね並尼さん」

「古里井の話だつて……。女子から情報は集められたのかよ」

「ああ、そつち」

合点が行った様子を見せる並尼さんに、そつちもどつちもあるかよと呟く。と

「んと　とりあえずケツコーな女の口聞いてみたんだケド、おみっちゃんについて不自然なところを感じてた口はいなそうなんだよねー。マジ。三十人には聞いたし。メール履歴とか残ってるし。見る？」

「別にそんなところ疑つちやいなえよ」

「あつそ。まー、おみっちゃん、目立つタイプの口じゃなかったからなー……。あ、でもでもー、だからこそつっついミだけど。ガツコでおみっちゃんの口知ってて、ウチの口しらない口とかいなかつたと思うな。逆もー」

「ああ？　つまり、女苗の学校での知り合いは……。女子については全員当たつたんじゃないか、つてことで良いのか？」

「そそ。100パーかつて言われるとビミョーっすケド、大方当たつたと思いますわー」

「お疲れ様。ありがとうね」
ふむ……。

情報に関しては進展なし　むしろ、ますます引つ越しと言うよりは消失と表現した方がしっくりくる　謎が深まって行く感じだ。古里井さんはもしかしてマジシヤンの卵だつたんじゃないかと思われるくらいに、見事な蒸発ぶりである。

スタンディングオベーションにはまだ早いけれど。

古里井女苗……。うん。そう言えば。

「そう言えば、並尼さんは古里井さんと仲が良かったんだっけ」

「んー？　まー、うんー。なんでそんなこと訊くワケ？」

「興味が半分だけどね。古里井さんのお引越　もはや失踪やら消失やらつて表現した方がしっくりくるけれど……。そのあた

りについて僕等は情報を収集して来はしたものの、彼女自身の人となりについては調べてなかったな、と思ってさ」

「ああ、確かに。一文字が好きになった奴　　くらいしか、俺も知らねえや。何度か会話はしたけれどよ」

「なるなるー。それでウチに、おみっちゃん自身の話を聞きたいってコトねー。千々泡も聞きたい？」

「時系列に沿った記憶処理機構を保有し自我を確立することによって個性を主張せし人間達の構成する社会に於いて、各人の形質とはその重よ」

「ごめん。アンタに訊いたウチが馬鹿すぎた」

千々泡さんの台詞を途中で遮ると言う荒業を、自然にやってのける並尼さん。彼女が広い交流を持っていると言うのには、案外このようなスキルが生かされているのかもしれない。等と思った。

並尼さんはズコーツとジューズを飲み干すと、話し始めた。

「つつても、まー、べつつにあんまり……説明下手なウチからじゃ、詳しいことは言えないんですケド。そーだなー、ヘンケンつつーのかな。そう言うの、あまり持たないコだったかなー」

「ふうん」

「一文字もそんな感じのこと、言ってたっけか」

「うんー。今でこそウチこんなカツコだけど、入学したての時は髪とかちゃんと黒くてさ。ベンキョーとか？　頑張ったりしてたことも在ったワケですよ。今から考えると、飼いならされたブタってか……なんも考えてなかったなー、あの頃」

「今も考えてねーだろ」

「あー、そうゆうーこと言うしー。今はそうでも無いっすよ。あの時ベンキョーしてたのはそれしかない……っーか、それ以外にやること知んなかった　　あるじゃん？　流されるままってヤツ」

「自分で選択していたわけじゃなかった？」

「そそ。時鏡つてばアタマいいなー。うん、そーゆうーアタマの良さはまるつきりなかったね。テストの問題解けてもさ、考えてないっ

っーね。今ガツコのペンキョーあんまやんないのは、選択してるんデスヨ。髪染めてんのも。とりあえず今はソツギョーできりゃいいんだ、ウチは」

「卒業してどうするんだい？」

「そーデスね。ウチはデザイナーにでもなろうと思ってるんだよね」「へえ、そうなのか」

鬨は興味深げに相槌を打った。僕もそんな話は初めて聞く。

なんとなく、彼女はドロップアウトしただけかと思っていた。

「じゃ……もしかして、そっち方面の勉強をしているのか？」

「ウン。実はねー。あ、ハズいから内緒にしといてー。売れてから知れるのは良いんだケドー……、実力もねーウチからチャホヤ？

されちゃうとさ。何て言うかさ。腐る？ 腐っていやがる、早すぎたんだ！ 違うか」

「決心が鈍る？ ぬるま湯に浸かってる感じで」

「あー、もー、時鏡の指摘的確すぎ！ アンタ委員長やってよ」「嫌だよ」

「だろーねー」

並尼さんが笑う。

と言うか、話が脱線してるよね。

「それで、古里井さんの話が主体だったはずなんだけれど」

「あ、ゴメ。そうそう。えっとまー、そっからおみっちゃんの話に繋がんだケドねー。ガツコで一年の時、おみっちゃんと同じクラスでさー、話す機会が在ったんだよね。つか、内容は良く覚えてないんだけど。どーしたっけなー、多分あの時のウチ、最悪な顔してたんだと思うわ。声かけられたんだよね」

「古里井さんの方から？」

「そ。おみっちゃんのほーから。つまらなそうな顔してるねー、みたいな感じで。ウチもあん時は、ツマンネーって応えたと思う。そしたら、『だったら、楽しく思えるように生きようよ！』とか、スゲーポジティブなコト言われたんだよね。ムカツキながら、話して

るうちに、なんか……好き、っつーか、いや、女子同士だから恋愛じゃなくて」

「惹かれた？」

「うんうん。困った時は時鏡にケンサクかければオツケーだね」

人を便利道具みたいに言わないでくれよ。

「でま、おみっちゃんつてば、センサーとか目指してるんだけど。同じ道じゃなくても、なんかE・N・A、あーなりたくないーってんでとりあえず好きなコトとかモノとか探して、思い切ってイロイロやってみることにしたわけ」

「結果、ついたあだ名が不良女子高生つてか」

「マジカンベン。ウチ、道は踏み外してないんですー。でも、おみっちゃんはそんなウチを応援とかしてくれたねー。うーん。おみっちゃんは、そうだなー……、ぱっと見目立たないし、個性ユタカって感じでもなかったけど……。優しい、つてのもそうかな。元気になるよう支えてくれる、みたいな」

「安心感と包容力のある人だったと」

「そだね。だからウチの大切なトモダチつてコト。ウチがいろんなヤツら話せるよーになったのも、おみっちゃんが安心させてくれたから、つて気がするよー」

「ふうん」

一通り食べ終えた鬨が、烏龍茶を飲みつつ頷いて見せた。しかし、そんな古里井さんが、周囲を不安にさせるように何も言わず姿を消すとも、やはり思えない。参考にはなっても、進展にはつながらない美談だった。

「こないだウチが沈んでた時も、手助けしてくれたよー。続末もあん時はアリガト」

「ん？ ああ……あれか。ま、別に……」

「うん？」

「あ、こっちのハナシー。聞きたいことそんだけ？」

「うん、ありがとう」

そろそろ今日の活動について　と、おっと。

まあ、このついでに訊いておくのも良い、か。

ちびちびとホットコーヒーに口をつけている、彼女の方を向いた。千々泡さん、砂糖・ミルクは全部入れちゃう派。

「……ついでだけど。千々泡さんは、何故協力をしようって気に？」
「話題の方向性が転換され、私が件の行動選択に至るまでの動機について尋ねられたのを知覚する」

「確かにちよつと気にかかるが……なるだけ簡潔に伝えてくれよ」

「我が内情推移について特殊な飛躍は観測されていない。つまり、千々泡切子たる私は個人的諸事情により、超自然的現象についての興味が深く、関連する情報を欲している故に過ぎない。貴君等に与することにより、より正確な検証事実をより迅速に獲得するのが目的である。そのため協力を惜しむ心算は持ち合わせていない」

全然簡潔ではないと思うけれども、鬨は別のところに突っ込んだ。
「超自然的現象ってなんだよ。オカルトか？」

「肯定はしかねるが、その解釈について誤解を訂正するに消費される時間と労力を予想すればこそ、試行には至らない」

「オカルト興味が高じて協力しようと言う気になったと、そんな理解で良いのかな？」

「否定の要素は在れど主張には値しない」

成程。掌君の最初の発言は確か、古里井さんが消えちゃったんだ。　　だったはずだから、そんな興味を引いたとしてもおかしくはない。用具入れや教卓へ身を隠してまで聞こうとするのは、女子高生としていささかおかしいと思うけれども。

それなりに彼女も、真剣に取り組んでいる趣味なのだろうか。

「みんな喰い終わったみたいだし、そろそろ今日の行動について決めようぜ」

「そうだね。旧古里井宅周辺の聞き込みだったかな」

「一文字の奴から地図を預かってるぜ。地域の組合に登録している家を、マーケティングしてくれたいらしい」

鞆からしつかり四部、紙の束を取り出す鬨。

渡されたそれらを、一同眺める。うん、コース設定も楽そうだな、これ。

「マジで？ 掌のヤツ、マジスゲーじゃん。ヤベエー」

「良く出来ているね。……一人で知らないお家に聞き込みするのも難しいと思うし、二人一組で動いたら良いと思うんだ。と言うことで、鬨と僕、並尼さんと千々泡さんのペアでいいかな？」

「待って。ウチ、千々泡と組める自信ない。会話続かないモン」

「千々泡は謡依担当だろ？」

鬨はいつぞやのお返しと言わんばかりに、僕にそう言ってくる。

ま……、仕方ないか。僕もそれなりに彼女の扱いには苦労してるんだけどね。

「そうかい……、千々泡さんはそれで良いかい？」

千々泡切子は、不透明な瞳でこちらを見つめて、頷いた。

「お互いの最大効率を導出すべく碎身しようではないか」

「ベストを尽くすってことね。それじゃ、鬨と並尼さんはこの地図の西側担当で、よろしくするよ」

「オツケー」

「おうよ」

席を片付け、移動を開始した。

諸君らの健闘を祈る。

* * *

古里井女苗は電車通学ではあったが、それほど遠い所に住んでいたらわけではない。四駅程度 紙燭灯高等学校と同じ、啼草市内で

ある。と言つわけで、移動時間はそれほどかからずにすむ。

「それじゃ、持ち分終わったらメールで報告つてことで」

「明日の日曜日、お昼ごろに掌君も交えて情報統合する予定だから、各自解散で良いよ」

「了解」

「時鏡も千々泡も、がんばるんば〜」

「享受した期待と同等の質量、貴君等に対しても期待を施そう」

「行動開始だね」

チーム同士が近場をうろろろしていると何の集団かと思われてしまいかねないので、ある程度離れて行動する。分担は東側と西側

僕と千々泡さんは東側担当だ。

作戦内容として、特に凝った手段を取るつもりはない。ないが、まさか引つ越したクラスメイトが行方不明なんです。などと切り出すわけにもいかない。何を言っているんだこの子たちは、アニメかドラマの見過ぎか、と思われてしまう。今日の聞き込みは、行き先を直接聞くのが目的なのではない。古里井家が引つ越しのことについて、あらかじめ告知していたかどうか、論点だ。

よって、古里井女苗の友人であることを主張し、家の場所と引つ越していることを訊き出す。

学校から直接来たので制服なのは致し方あるまいが、彼女と同じ学校生徒であることは見て取られても、同じクラスとまではわからないだろう。何かの企画で会いに来た知り合いとして、誤魔化しはいくらでも効くはずだ。

一軒目。

表札によれば、栗東さん宅。チャイムを鳴らし、道を尋ねたい旨を伝える。感じの良いおばさんが迎えて下さった。

「お手数おかけいたしますが、古里井女苗さん……あ、えっと、友人宅の古里井さんのお家を探しているのですけれども……」

丁寧だが、良く場所も調べないで友人に会いに来ると言う、勢い任せなところが若者らしい……そんな雰囲気装っての切り出し。

上々だ。

「そおなのー。古里井さん、ねえ。あの古里井さん、かしら。確かお嬢さんが高校生くらいって聞いてたものね……確か、そっちの通りを真つ直ぐ行った辺りにお住まいだったと思うけれども」

記憶を手繰るような様子を見せつつ、説明して下さる栗東さん。

この様子だと、引越したことはご存知ない、ようだ。

「貴君に疑問を呈する事を欲するが許可の頂戴は可能だろうか」

「……は？」

思案を巡らせつつ、適当な相槌を打っていた横合いから、千々泡さんが会話に加わって 来た、って言うか、嫌な予感しかしない！

持ち前の流れるような台詞繋ぎを發揮する彼女。

「古里井女苗氏の所属せし一家は、一般的な家族と呼称される集団の最小単位によって構成されている 俗称を用いるのであれば、核家族と呼ばれる類ではあるが、彼らが昨今 正確には先週の第四日目、つまり二つ以前の水曜日に転居を執行した、とされる事実が申告されている。されど転居先として示された地点に彼女等一家の姿の確認が不可で在ったため、ここに生じる不可解さを解消すべく、我々は活動を開始するに至ったわけである。以上の旨に関連して、貴君の持ち得る情報とそこから洞察される論理的帰結について御意見を参考させて頂きたい」

何を言っているんだこの子は。

君はアニメかドラマの見過ぎなんじゃないのか。

栗東さんは、絵に描いたようなきよとん顔。

「はあ……、ええと、あなた、お嬢さん……それはつまり？」

「いえ、成程。わかりました、ありがとうございます。大変お騒がせいたしました」

「え？ ええ」

「それじゃ」

千々泡さんを抱えるようにして手早く移動。

離脱。

緊急脱出だった。

「時鏡謡依氏。貴君の行動の意図の理解に失敗した」

「僕は君の方の行動の意図が理解できないよ。あんな突飛なことを言つて……、聞けるものも聞き出せなくなつてしまふ」

鬨と違つて、僕は運動が得意な方ではない。運動神経が鈍いとまでは言わないけれど、体力面の自信は全然ない。したがつて、千々泡さんを連れての強引な移動で、呼吸が乱れ気味。まずは息を落ち着かせる。

「認識が至らず無自覚の内に失策を生じさせていたのであれば、謝罪と反省を実行し再発の可能性を最大限削減する意志を明示しよう」
相変わらず涼しく無表情な千々泡さん。

予定外に時間を食うことになつてしまつたが、労を惜しまず、彼女へ聞き込みに関する心構えとこちらの狙い、世間様の一般的かつ常識的な反応について教え込む。これはあらかじめ施しておくべきだつたかなあ、と、覆水盆へ返らずに思いながらも。

苦勞の甲斐あつて、彼女は理解したような様子を見せた。

「貴君の言わんとする行動意図について提起する反駁と疑問は尽きたと言つて虚偽にはならない」

「わかつてくれて助かるよ……。ついでに言わせてもらいたいんだけれど、その喋り方　口調、なんとかならないかい？」

「私の言語表現に不明瞭或いは不適当な部分が検出されたと貴君は指摘し、故に認知と改善を催促しているのだと推察する」

「うん。正直に言つてしまえば、かなり変だよ。少なくとも聞き込み向きではないね……。さっきのモチモツツアレバーガーを注文した時みたいに、もう少し親しみやすい喋り方……周囲の人に近い表現方法、出来ないかな？」

千々泡さんはそう言われて、軽く首をかしげてから、こう言つた。
「善処する。例証を提示するため、会話導入を所望する」

「ん？ えっと、じゃあテストしてみようか……。千々泡さん、今日の調子はどうだい？」

「おういえ」

極めて平坦に言われた。

せめて、Oh Yeah! と言うくらいノリの良さが欲しかったけれども突っ込みどころはそこじゃなかった。それどころじゃなかった。某有名ロールプレイングゲームで言う、メダパニを唱えられた上ふしぎなおどりを見せられたような心境に陥った。

自分を殴りつけた感じだった。

「……もう少し、別の口調を考えてみてくれないかな……?」

「いえいう」

「ちよつと千々泡さん……い、意思疎通すらそれじゃ困難な気が」

「ハレルーヤ」

「……………」

何を祝福しているんだろうか……。

「ピロシキ、トムヤムクン」

ロシア料理とタイ料理のコンビネーション。

「ナマステ御免」

そして、挨拶するなり謝るインド人に扮する千々泡切子。

「千々泡さんの潜在能力を甘く見てたよ、僕は……」

「フォカツ、チャ」

極めつけにポーズつき。左手ピースを横向きにして、そこから覗くような。

微動だにしない表情も相まって、意味不明さが果てしない。

「元に戻してくれないかな」

「異論を挿む間隙は見取れない」

元に戻ってもまるで宇宙人だった。

しかし、どうしたものか……黙っていてももらってもそれはそれで良いんだけど、ちよつとあんまりだよねえ。確か そうだ。普通の対応をしてみせたさっきの注文時では、他のお客さんの真似をしたって言ってた気がするな。

それならば。

「千々泡さん、並尼さんの真似って出来るかな？」

「ウソ、時鏡ってば、マジでウチが並尼のマネなんか出来ると思っ
てんのー？」

「ばっちりじゃないか」

その、山のように揺らぎもしない無表情以外は。

ま、多くは望まない。素（？）の口調よりはずっと、意思疎通も
聞き込みもスムーズだろう。……けれど、その物真似、並尼さん
の前では絶対やらない方が良い気がするけれどね。

「今日の間だけで良いから、並尼さんの真似をしながら聞き込みに
付き合ってくれるかい？」

「オツケー。ちょっと自信ないけど、まかせてー」

命名、マネキン系ギャル。って感じだった。

さて置きまして。

退屈な聞き込みの過程は大きく省き、結果のみを記述することに
する。

大方の予想通り、古里井家の引っ越し自体を知らないお宅がほと
んどだった。御存じだったお宅でも、突然引っ越ししてしまい、転居
先については良くわからない。と、今までの見解を変換させる必
要のない、補強のような情報を得た。地を固める、足踏みのような
前進である。

古里井家は、近所付き合いは悪い方ではなかったが、取り立てて
良い方でもなかったと言う。地域行事、町内会のお仕事などは、頼
まれたりすれば嫌がらずそつなくこなす。しかし積極的に交流を深
めたり、広めたりする雰囲気は見られなかった……。のだから、一週
間程度では、引っ越しのことすら知らない家宅がほとんどだと言っ
るのは、不自然ではないだろう。

古里井女苗さん本人と同じく、目立つ一家ではなかったと言っ
とだ。

ここまでのノルマ達成に二時間半ほどかかってしまった。途中で
休憩、水分補給もはさんでのトータルではあるけど。

「結構時間食っちゃったなあ……。鬨達からはさつきメールが来て、先に帰ってるってさ」

「マジすか。続末達、チヨイ早いんですケド。超881」

「まだ偽並尼晦日さんな、千々泡切子さん。」

「僕等も終了にしようか。あとは帰るだけだよ」

「うんー、乙ー」

「駅まで一緒に行こうか。この辺りややこしいしね」

「おー。時鏡ってば、気が利くうー」

「もう、元の喋り方で良いよ」

「承諾が確認されたため、現時より平時の言語表現を使役すると宣言する」

すばっと戻せるんだなあ。

「鬨の真似とかもできるのかい？」

「ふざけんなよ謡依。俺はお前の玩具じゃねえんだぜ」

「掌君とか」

「え……。ええと、ぼ、ぼくはひ、人と話すのとか苦手だし……。その、あまり会話に向かない、って言うのかな……」

大した器用さだなあ。全然表情変わらないから、盛り上がりには欠けるんだけど。

と言うより、その器用さを常識習得に使って欲しかった。

「千々泡さん、本当に戻して良いよ。それとあまり、物真似は本人達の前でしない方が良いと思うから、今日並尼さんを真似たりしたことは秘密ってことで。よろしくね」

「そうだね。並尼さんのことだ。また地面とにらめっこしながら痙攣しかねないし、下手をしたら自慢のポニーテールが怒髪天を突きかねない」

「……それ、僕かい？」

「状況的に不公平であると直感から告知を受けた故の所作である」
やってくれるじゃないか。

予想通り、目の前で物真似をされると不愉快ではあったのだけ

ど……それよりも、不可解さの方が先に立つことが分かった。僕ってそんな言葉づかいだったかな。

そして不可解さ、不可思議さを言えば、古里井女苗の消失。それをはるかに凌駕する、千々泡切子と言う目の前の存在がいる。せっかくの機会だし、少し話をしてみようか。

「……千々泡さんって、そう言えば部活は何に所属しているんだい？」

「千々泡切子と言う個人名称が現在所属する教育機関、紙燭灯高等学校に於いて既存する部活動。すなわち生徒諸君の活動力および創作衝動を消費させ昇華させる事を主たる目的に置いた団体行動。その種類は多岐に渡る。されとて、いずれにも前述の名前。千々泡切子の従属は見受けられない」

「帰宅部ってことか。ふうん……それじゃ、普段はどんな事をするんだろね」

千々泡さんは、ここでどう言うわけか、伶俐そうなその容貌を僕へ向けた。ショートカットヘアが、風を受けてかすかに揺れる。彼女はそのまま、少し無言でいて、それからまた視線を戻した。何を考へてのことかは、予想がつかない。千々泡切子のことについては何も予想がつかない。が正しいか。ともあれ、彼女は応えてくれた。

「学術的見地から独自に世界現象について解釈を行い、結論付けた内容について文字表現を用いて論述し、然るべき機関へそれを提出・配送を達成することで発表の場をも獲得している」

「……論文でも書いてるって……、そう言うこと？」

「否定する要素は見当たらない」

「へえ……。ああ、もしかして。お昼に言ってた、個人的諸事情による超自然的現象の興味。って、その論文についての情報を集めてるのか」

「肯定以外の対応を私は発想し得ない」

一介の高校生が論文を書いて、しかもそれを発表している……と

は、なかなか驚きなお話だ。どんな家庭に住んでいるのだろうか、興味がわいてしまう。訊いて良いものか、少し迷ったが、まずい事だったら彼女もそれとなく拒絶するだろう、などと都合良く考え、訊いてみることにした。

好機は徹底利用すべきだろう。

「失礼だったり、言いたくない事が在ったら勿論口を閉ざしてもらって一向に構わないんだけどね……、千々泡さんの家庭周りの事情ってどうなってるんだい？ 君の年齢で論文を書こうと思うのは、相当特殊な気がするんだけど」

「己が生命原理を継続的に機能させるにあたって必須とされる行為に纏わる責任の総てが、自身に集約され帰結する連日の渦中に身を置いている」

「一人暮らしなのかい」

千々泡さんは頭部を前方へ倒し引き上げる動作……言い回しがうつってるな。つまり首肯して見せた。

聞くところによると、やり取りのいちいちを書き綴ってもいい加減冗長なので、要約して地の文で述べてしまう。千々泡切子さんの御両親は、現在日本にいらっしやらないらしい。と言うのも、御両親ともが揃って研究一筋の研究者様だそうで……、実のところ小学校入学以前から、彼女は一軒家の実家で一人暮らしをしているそうだ。だだっ広い、また彼女曰く書籍棚のような家に、一人。御両親とは年に数度の短い電話と、五歳の時から通算四度の対面程度しか、交流をしていないらしい。

学費類の振り込みは勿論、必要資金は十分に仕送りされてくるし、食糧や衣服も基本的に配送されてくるそうだ。自主的に何か購入する場合も、ネット通販とのこと。カードが使える場合はカード支払い……ファストフード店が初めてだったわけだ。

進学相談の際や、家庭訪問、保護者見学など。両親が必要とされる場合でも、日本へ戻ってくる事は最小限、居なくても良い場合は姿も見せない親。書類類の手続きは言えば勝手に処理してくれ、成

績や行動についてはノータッチ。論文関係については、御両親の口ネを使い荒してららしい。

甘やかしてすらない、極致の放任主義だ。

千々泡さんは良く、グレたりドロップアウトしたりしなかったものだ。成長過程次第では、一人で死んでいてもおかしくない。他人とのコミュニケーション……社交術に難ありな部分も領け、むしろこれでも随分ましに育った方なのだと、そう思った。

宇宙人でも異常人でもなく、ただ人間外な経歴だった。

もしかして彼女にとって、他人とは映し鏡などではなく、事象の一つでしかないのかもしれない。群衆も個人も、社会も文化も一緒くたに関係なく、視界を彩る一現象。それはさながら、表情を理解しない機械仕掛けの人形のような。

代替可能な言語表現のような。

服飾品のような人格。

「千々泡さんは何だか、伊達眼鏡みたいだね」

さしもの千々泡さんも、数瞬の沈黙。

「貴君の発言意図を尽くまで汲み取り損ねた。比喻表現と言う予測の下質疑への応答を渴望するが、貴君が提示したのは、光波の屈折性質を利用した透明体を用い視力を矯正する調度。眼鏡と称されしその趣を模した服飾品で違わぬだろうか」

「そうだよ。でも深い意味は無いさ。眼鏡が僕好み似合いそうだけれど、君は別に目が悪くなかったよね。と、それだけの話がほぼ半分。もう半分は……まあ、いいか」

「自主的に些事と判じ口外する重要性の低迷から言及を回避したと理解する」

「うん。否定する要素は見当たらない。だよ」

「肯定の意志を確認し精神の惑乱が阻止された」

物真似に関しては何もコメントが無かった。反応すら見せない。予想出来た対応だけれども、気づいてないことは無いと思うし、ちよっと寂しかった。

そんなこんなで、そろそろ駅に着く。

本来の目的じゃなし、千々泡切子について掘り下げるのはこの辺りですよ。

最後に、と。僕は彼女の方を向く。

「明日の集合時間は、十一時にシャト・ノワール　紙燭灯高校の近くのチエーン喫茶店……、つて、知らないか。うん、十時五十分くらいに学校前に迎えに行くから、そこで待っていてくれないかな」
「貴君が指示する明日の行動見込みに関する思惑の意については不満は存在しない」

「よろしくね。ところで千々泡さん、何についての論文を書いているんだい？」

気になっていたものでこれだけは、なんて思い、さりげなく訊いてみた。

彼女は変わらぬ調子で応えた。

「隠蔽の持続する並走せし現実についての思惟と論証。常識や世間と認知される虚構の暴露。それは超自然的現象が人為的に惹起される可能性を包含している。知覚から確信へ至る諸々の要素的断片は随所に発見され得るが、倫理観ゆえの徒党に圧迫されつつある。すなわち私の叙述は彼の者等からすれば反逆意志であり、此の者等からすれば革命発起である。がしかし、自身にその志向は皆無である。あらゆる事象は只管の観測に曝される物であり、心意は存在し得ない」

珍しく、一呼吸置いて。

「私は唯、真理を掻き乱すだけ」

「何だか……あまり穏やかじゃないね」

「貴君　時鏡謡依氏は既知しているのではと、邪推する」

不透明の、そのまた向こうの、何も無い空間から、意思と呼ぶにもあまりに不器用な、彼女の心が、僕を見据えているかのようにな、感じられた。

勘違いだったろうか。

「その考察は既済ではないか。他表現を用いるのなら、貴君は古里井女苗氏の失踪を超常識的現象と見做し、且つその側面よりの解法接近の手法を有していると所見を述べ次第である」

「……お生憎様。僕は何も知らないさ。そんなのは言いがかりだよ。ただ、そのアプローチだけは、最後までとっておきたかった。

出来れば触れたくなかった。それだけだ。

一度俯いてから顔を上げ、薄く笑って、両の手のひらをひらつかせる。それからポケットに手をつ突っ込んで、言った。

「じゃあ、また明日」

千々泡さんは首肯を示した。

黙したままで改札を抜けて、ホームでため息。

ココアシガレットを啜える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3073k/>

泡吹き等の命 ~ Are there "Our"; Days? ~

2010年10月10日15時05分発行